HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ヴェニスの商人』 : 贈与のトポス
Author(s)	小川, 泰寛
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 53, 27-67
Issue Date	2007-12-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34559
Type	departmental bulletin paper
File Information	OGAWA.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ヴェニスの商人』―― 贈与のトポス

小　川　泰　寛

自身が持ち合わせていなく同胞のテューバルから借りて、高利貸しシャイロックは仇敵アントーニオに三千ダカットの金を貸す。これは一応は無償の融資であったが、人肉抵当を付帯させた奇妙な取引であった。抵当を取立てる事態が発生し、債権者シャイロックは裁判を起こす。いわゆる人肉法廷がかくして開かれる。周知の通り、裁判官バルサザーに扮したポーシャの辣腕により、この取立ては不可能な試みと化す。アントーニオの心臓近くから切り取られるべき一ポンドの人肉というのが本抵当の内容であってみれば、結果は人道上も快挙と評すべきものである。

だが、本法廷でおかしなことが実は起こっていた。人肉契約の法的妥当性が争われたはずの裁判で、三千ダカットの債券が反故とされてしまったのである。証文至上主義を貫きシャイロックは、債務不履行の代償として被告の陣営の側が提示した巨額の和解金を峻拒した。その頑な姿勢は、元金受け取りの拒絶をも内包するものと、ポーシャにより拡大解釈されてしまう。形勢が逆転した中、彼は必死でこの金の返還を要求するが、「この者は当法廷で公然とそれ[元金の受領]を拒否したのだ」(4.1.337) との理由で、その主張を一蹴される。今や彼が受け取れるものは「正義と、証文どおりの担保のみ」(338)。無論、「担保」、人肉抵当を取立てる際に、一滴の血も流されてはならず、切除される肉片の目方は精密に、定められた分量でなければならない。

ポーシャの対応は不公正である。というのも、「担保のみ」が「証文どおり」に対処されるべしとの立場を取っているからである。血の条項とは違って、金銭貸借証書として「証文」には当然元金の返済についての一項が盛られていたはずである。その文言も「証文どおり」に扱われるのが筋であろう。抵当はいざ知らず、元金の取り立てについてシャイロックは正当な権利を主張し得た。両者が一括りで記入されていたという仮定も成り立たない訳ではないが、こうした契約では各々、別個の項目として立てられるのが普通であろう。

本当に元金の受け取りを拒んだのであれば、責任はシャイロックにあろう。が、彼には覚えがあるのであろうか。実はテキストを精査してみても、その痕跡は検出されない。人肉法廷のたぎり立った雰囲気、多幸症めく狂騒のなせる業なのかどうか、この食い違いはすべての人の注意をすり抜ける。あるいは、ポーシャの魔術的とも称すべき雄弁術に誰もが惑わされている

のかも知れない。[1)]

債権それ自体はあくまで有効であると考えるべきである。商法上、アントーニオは債務を履行せねばならない。むしろこれは道義的な要請と言ってよいであろう。彼の財政的破綻は免責の理由とはならない。彼が恩を売ったバッサーニオが、この何倍もの金の醵出を苦境から救い出すべく既に申し出ていたのである。バッサーニオの好意に頼ったところで、何の不都合もなかったはずである。本借財の弁済は、商人としてのアントーニオの廉直さ、あるいは誇りとかかわる事柄であったと言えるであろう。ポーシャの妨害は懸念材料とはならない。アントーニオにそれを制しようとしても、彼女には盾とする法がなかった。彼女に理はなかった。

三千ダカット。生半可な額の金ではない。ある換算式に従えば、今の日本円にして、一億二千六百万円にも相当する。[2)]

「商人王」(3.2.239，4.1.29；拙訳)の異名で呼ばれたアントーニオ。察するに資金を巧みに運用した高利貸し業によって財を成したシャイロック。ヴェニスで屈指の資産家であるはずのこの二人が反面、この程度の金を工面出来なかったというのは意外な気もする。沽券にすらかかわる話と言えなくもない。

桁が一つ上がって、十億の位ならば納得出来る。がそう考えるには無理がある。というのも、この金はアントーニオの若い親友バッサーニオの言うなれば結婚の支度金に該当した。無一物を通り越して借金にどっぷり漬かったバッサーニオが、アントーニオに該目的で融通を懇願した金であった。自身語っているように、白羽の矢を立てたポーシャを射止めるには、他の王侯君主然とした求婚者に見せかけの上でひけを取ってはならなかった。彼は富を衒示する必要があった。とはいえ、十億は法外だ。その一つ下の位と取るのが無難であろう。

実業家の二人は余分な金があれば即事業に運用していたであろうと想像されはする。とは言え、事業に転用するには及ばない純資産というべきものはあったに違いない。それが件の額を下回るとすれば、どこか普通でない。多分にレアリズムでは割り切れない部分が疑われる。単に多額というよりも、死に至りかねない危険な金銭貸借行為を必然的に惹起せしめる大金。元金の三千ダカットは、そのような宿命性を帯有するものとして立ち現れている。本質的に額面の時価についての詮索を無用とする、何かしら脱計量的な契機がそれには備わっている。

註１）で触れた直接の種本で借用額は一万ダカット。[3)] 先の計算に準拠するなら、四億二千万円。件の物語は本篇のおよそ四十年前に書かれたものであり、実際の額面はこれを上まわるはずである。あり得ない額ではなかろうが、「一万」という数字をシェイクスピアは結果的に退けた。恐らく「三千ダカット」の「三」に象徴的な意義を認めて、こう縮減したのであろう。因みに、同種本では返済期限は何ヶ月以内にというのではなく、来る聖ヨハネ祭までというものであった。[4)] 三ヶ月間の貸付けという趣向も意識的であったと判断される。言うまでもなく「三」は聖なる数。おとぎ話や民話、神話や伝説で頻出する。特に『グリム童話』では「三」の使用は突出している。本篇も「三」のモチーフにつらぬかれている。「三千ダカット」も、明らかに

その一環である。(三つの小箱選びを扱う別稿での論点を、われわれは先取りしている。一般的に、「三」の数秘術の視角からシェイクスピア劇全体を俯瞰する試みがなされてもいいように思う。)

数値へのこだわりはこのくらいにとどめて、本金銭貸借に見られるある種の錯雑に目を向けなければならない。借り方アントーニオと貸し方シャイロック。図式はそうすっきりしてはいないのである。バッサーニオとシテューバルもこの取引に引き入れられている。貸借関係はこうだ。つまり、テューバルが即金で用立てシャイロックに貸与し、シャイロックがアントーニオに貸し出し、アントーニオがバッサーニオに貸し与える。バッサーニオの関わりはプロットの展開上、うなずける。しかし、テューバルは余計でありはしないだろうか。彼の介在は無償性をうかがわせはしないだろうか。羽振りの良いシャイロックを専一的に本ローンの引き受け手とさせる。それで何の問題もなかったはずである。疑いもなく商行為である融資。それはそのようなものとして、必然的に媒介性を孕んでいる。そのような寓意がここには伏在しているのであろうか。この方向での議論に立ち入るのは、しかし控えよう。

別な局面、つまりユダヤ教の掟にそって純然と無利子でなされたに違いないシャイロックとテューバルとの金銭貸借が、アントーニオとシャイロックとの間の見かけ上は同様の取引を照射している事実に、注目しよう。完全に無償なるテューバルの貸し付けは、人肉切除なる変態的な利子を実は付随させた後者の不純さを浮かび上がらせる。この単純明快なる、こう言ってよければ、晴朗なる貸借契約は、宿命の、屈曲した貸借契約の実相を映し出す明鏡たり得ている。テューバルは決して員数外の存在ではなかったのだ。テューバルは種本には登場しない。この人物を本篇の主筋に組み入れたのはシェイクスピアの創意である。

テューバルはユダヤ人共同体の一員として、敬虔なユダヤ教徒であったろうと推察される。その彼が人肉契約なる、流血を伴う身体上の毀傷行為を厳禁したユダヤ教の掟に背く企てにおいて、資金面で協力している。(具体的に使途は知らされていなかったのだろうか。)シャイロックの親友とはいえ、その間柄は対等ではなく、相手の意のままに動くところがある。シャイロックに頤使(いし)されているところすらある。本篇での彼の行動全体を俯瞰する時、この印象は深い。瞠目すべきはしかし、彼の実践的とも称すべき資力である。テューバルは人に頼ることなく三千ダカットの大金を用立てしている。テューバルの富は、この額の最大二十倍の金貨を即刻用意する意志を言明しているポーシャ(3.2.306-07;彼女にとってそれは「わずかな借金」[307]でしかない)の底知れぬ財力には匹敵すべくもないであろう。けだし、それは何から成り立っているのか。彼はアントーニオのような豪商でもなく、シャイロックのような成功せる高利貸しでもない。ポーシャの富の根源である封建的な大土地所有は、キリスト教西欧社会にあって不動産の所有を禁じられていたユダヤ人の彼にとっては、無縁だ。無職にして閑暇を常に享受しているこの金満家は、近代の資本主義が産み出した有閑人なのか。シャイロックが単に「私と同じユダヤ人の金持ち」(1.3.54)と言及しているテューバルの富裕振りは、本篇で富に多様

性を添えている。

アントーニオのみならずシャイロックにとってさえおよそ想定外であった債務不履行の発生によりドラマはドラマとして成立しているのであるが、こうした不始末はシャイロックとテューバルの金銭貸借においても起こり得た。というのも、法廷の後半部で異邦人法に対する侵犯の故に、シャイロックは全財産を巻きあげられかねなかったのである。もし実際かかる目に遭っていたなら、財政的な破綻者なるシャイロックが、借金の三千ダカットをテューバルに返すのは不可能となっていたであろう。幸い、財産の半分をとどめ置くことを彼は許された。一応、「財産の半分に対する罰金を免じてやっていただきたい」(4.1.380)とのアントーニオの執り成しが功を奏したのである。テューバルは同胞に貸した金の回収を見込めることとなった。アントーニオの働きは、シャイロックのこの同胞をも利することとなった。(テューバルは法廷を傍聴していたかも知れない。とすれば、こうした消息に直にありついたはずだ。)シャイロックの財産の半分が、この借財をまかなうに足らないかも知れないと考えるには及ぶまい。

本金銭貸借で本来の借り手、原債務者であるバッサーニオがアントーニオにした借金は、どうなるのであろうか。問題の三千ダカットは純然たる債務。バッサーニオは返済の義務を負っている。幸運にも、この金を原資として、大資産家のポーシャと結婚出来たバッサーニオは、新妻の有り余る富のうち極一部をこの借財の処理に充てるだけで、事は済もう。

債務者であったはずのアントーニオは、はからずも債権者となった。彼は元金に対し思いがけなく所有の権利を有するに至った。債権者シャイロックにこれを返済しなければならないのなら、バッサーニオが債務を履行したところで、アントーニオには何も残らない。債権者シャイロックが商契約上の権利を無理無体にも放棄させられたからこそ、つまりはアントーニオの債務が帳消しになったからこそ、バッサーニオに対する債権は丸ごと彼名義の資産となるのである。アントーニオがバッサーニオに借金の返済をいっかな促さず遂に債権を放棄するという成り行きも考えられなくはない。その場合、この金はバッサーニオに贈与されたとみなし得るであろう。これはあくまで結果論である。

シャイロックの側からすれば、人肉法廷を司ったバッサーニオの妻ポーシャの裁量により、これをアントーニオに譲り渡すよう余儀なくされた。本法廷は原告のシャイロックに対し、その意に反し、資産の一部を被告のアントーニオに譲渡しなければならないとする旨の決定を下した、と考えることが可能である。人肉抵当は言うに及ばず、被告側から和解金として提示された金に対する権利をシャイロックが喪失したのは、純論理的に説明がつく。しかしながら、本稿の最初に触れたように、貸付けの元金についてはシャイロックは返戻を正当に主張出来た。

この金は司法の現場で踏み倒された。非合法的にその権利は剝奪されてしまった。ポーシャが確信犯だったのかどうかは、判断が分かれよう。ただ、打ち消し得ない事実はアントーニオの借財が破棄されたということである。そこには譲渡の一変種が現存していた。

象徴的な情景である。これは序奏であったのだろうか。異邦人法の干犯を事由とした人肉法

廷の後半部で、譲渡は無恥にして扇情的な展開を見せる。これはその不穏な前触れであったのだろうか。伏線として、差しはさまれていたのであろうか。

原告と被告はいつのまにか入れ替わる。元原告のシャイロックは、異邦人として、はからずもヴェニス市民アントーニオに対する殺人未遂のかどで告発される。有罪の宣告は必至だった。罰は相当長期に渡る、場合によっては終身の禁固刑であっても不都合はなかったはずだが、異邦人法の定めに従って、先ずは信じ難い程に厳しい罰金刑が言い渡される。商業都市ヴェニスにあって、由々しき犯罪は第一義的に金、それも莫大な財貨によって償われなければならない。

ポーシャ　ヴェニスの国法はこう定めているのだ、
ヴェニス市民にあらざる者において
直接、間接の別を問わず、
市民の生命を奪わんとする意図が明白なる場合、
生命をねらわれたる市民は、
相手の財産の半分を取得し、
他の半分は国庫に収めるものとする。(4.1.347-53)

国庫への納入の件はさておこう。被告の全資産のうち、半分が原告に移譲されるべきである。かかる「取得」は、「法の趣旨に照らせば、／……／充分に正当なものだ」。「当法廷がそれを認め、国法がそれを与える」。「国法がそれを許し、当法廷がそれを認める」。(246-48，299，302) ポーシャはシャイロックに人肉抵当取立ての権利を当初認めた際、そう明確に、そして執拗に宣言した。ここでも彼女は、あの言葉を同じ口調で繰り返すことが出来たであろう。[5]

権力が一個人を非力化し、その者の財政上の権利を移し替える。財は司法当局により攫取(かくしゅ)され、そのうち半分は特定の他者に移管される。それまで当該の個人と不倶戴天の敵として反目し合って来た者こそが、受益者である。異議申し立ては一切無用。この個人は、ただただ沈黙を強いられている。しかし、その返還を裁判官ポーシャのほとんどカリスマ的な独断で踏みにじられた先の元金の場合とは異なって、この配剤はあくまで法に則ったものである。[6] 大金ではあった元金にしても、このようにして譲り渡される金の比ではおよそないであろう。

「あの人の中には／名誉を重んじる古代ローマ人の精神が息づいている、／その点ではイタリア中の誰にも負けない」(3.2.294-96)。バッサーニオはアントーニオをそう評している。恩義を考慮するなら、バッサーニオの献辞は少々割り引いて考えねばならないが、アントーニオの大人(たいじん)振りは伝わってくる。ローマ人の風貌をたたえたアントーニオは、一面で往古の高潔にして誇り高い先祖の稀有の末裔である。上の贈与の受贈はとするなら、彼のこうしたイメージには合わない。財に対し、殊に突き詰めて考えてみれば筋のあまり通らない財に対し超然としている。そういう姿を人は期待するかも知れないが、現実は散文的だ。彼は、譲渡の決定に唯々

諾々と従っている。どうしてなのであろうか。これを拒めば、異邦人法があやうくなると慮ったのだろうか。おごそかな掟が遵守されないならば、その権威は危うくなる。

ただ、異人法は峻厳さの外観とは裏腹に、実際の運用に関してはかなり緩やかであるようにも思われる。というのもポーシャは先の宣告に続けて、「罪人(ざいにん)の生命は公爵の裁量にのみ委ねられ、／何人(なんぴと)も異議を差しはさむことを得ず」(4.1.354-55) と申し渡している。このヴェニスの最高権力者の「裁量」(原文では、“mercy”、つまり「慈悲」) により、シャイロックが命を免じられたのは、周知の通りである。決定にしても確然たるものではない。ポーシャの判決はアントーニオにより、シャイロックの財産の半分の国庫への没収という相当重要と思われる部分につきくつがえされた。アントーニオが件の譲渡を固辞したとしても、異人法が揺らぐ結果にはならなかったと考えられる。

自明のこととして、逡巡することなくアントーニオは新たに生じた財政上の権利をわがものとする。そして、これを将来他人に譲渡する旨、法廷で宣明する：シャイロックの財産の半分は「この男が／私に委託するなら、彼の死後、／ある紳士にゆずりたいと存じます、／最近彼の娘を盗み出した男です」(4.1.381-84)。「この男」、つまりシャイロックが「委託するなら」などと前置きせず、あるいはもったいぶらずともよかったであろう。アントーニオはこの取り分につき権利を既に法的に取得しているのである。これを他の「男」、そうロレンゾーに贈るのに、元の所有者の同意を得る必要はさらさらない。

人もあろうに、アントーニオはロレンゾーにこの財を継がせる決心をする。当のロレンゾーは、健全な金銭感覚に全く欠けている人物である。彼が、いつの日にか転がり込んで来る（極近いうちということも考えられるが）財産を堅実かつ有意義に使用すると想像するには、余程不信を宙吊りにせねばならないであろう。乱費して、早晩蕩尽するのがおちなのだ。それは彼にあっては死金でしかないであろう。語弊を恐れずに言えば、アントーニオはこの金を溝に捨ててしまったも同然なのだ。公産とされたならば、生きたであろう。しかし元より、相手を選ばずこうした愚かな譲渡を行ってはばからないアントーニオには、これを生かそうとする心積もりは果たしてあったのであろうか。

作品中、アントーニオの意志は本人に伝えられていないが、寄生的な生き方をして恥じることがないように見受けられるロレンゾーがこのおいしい贈与を辞退する様は、思い浮かばない。

贈り主の善意はかえって、贈られた側の品位を貶める結果にならないであろうか。その生活は一層自堕落で無軌道なものになりはしないであろうか。善行はお門違いの人間に向けられた。アントーニオには物が見えていない。

ある社会学者は贈与者は贈り物を通し、受贈者の社会的アイデンティティを規定する旨、述べている。卑近な例として挙げられているのは、クリスマス・プレゼント。親は子供にその成長の過程に応じて、贈り物を変えて行く。悪く言えば、贈り物によって贈られる側は、アイデンティティを押しつけられる。[7] こうした事情は本贈与の格好の評釈たりえていないだろうか。

全く労せずして、一友人から巨額にのぼると推量される財産を贈与されるロレンゾーは、それがために経済的に自立し得ぬ、甲斐性無き身であることを世間にさらしているともみなし得よう。こうも言える。つまり、本贈与をチャリティと取るなら、これを向けられた者はそれを必要とする程に困窮した人間である。

受贈者として何故ロレンゾーが指定されたのであろうか。一応友人であるとはいえ、互いにさほど親しい訳ではない。バッサーニオなら話は分からなくもない。アントーニオが度外れなまでの愛情を注いでいるからという以上に、二人は親戚筋であるからだ。[8]（もっとも新妻によって大富豪となったバッサーニオには、かかる寄贈はもはや不必要に違いあるまいが。）自分に仇をなそうとはしたが結局は完膚無きまでに打ちのめされたシャイロックを気の毒に思い、代償的にその娘婿によくしてやろうとしたのか。だが、「最近彼の娘を盗み出した男」（“the gentleman/That lately stole his［Shylock's］daughter”）と殊更アントーニオが形容する当の娘婿に対するシャイロックの悪感情が熾烈なものであることを、アントーニオ自身知らなかったはずはあるまい。比喩の次元では、確かに若い男は、娘の父親から娘を盗む存在なのであろう。本篇ではけれど、ロレンゾーは文字通りこの行為をやってのけている。だから、アントーニオの言葉には揶揄がひそんでいるのは否められない。義父と娘婿との和解をはかろうとするのが真意なら、かえって逆効果であるのは明らかだ。自分の財産の半分がこのような男の手に最終的に渡る。相手が娘の連れ合いであるということを考慮しても、これはシャイロックにとっては堪えられない成行であろう。

切歯扼腕するシャイロックがアントーニオには愉快であったのか。そう勘ぐりたくなる挙に彼は出た。厳し過ぎる見方だろうか。

公衆の面前で、傍聴人も多数いたであろう法廷という公の場で、シャイロックは全き敗者だ。それとは著しい対照をなして、アントーニオの威光は際立っている。片言隻句聞き漏らすまいと耳をそばだてている聴衆を前に、この気前よい贈与を表明し、利他的な心性を見せつける彼は、一身に威信を体現していると言って過言ではない。

贈与の本質をなすものこそは正しく、贈与者のかかる栄光である。マルセル・モースがその古典的な論考の中で文化人類学や社会学の知見を自在に駆使しつつ論証しているのは、この真実に他ならない。原始・未開社会に見られるポトラッチは贈与の究極形態である。社会的な虚栄を達成すべく、部族の長がいかに競覇的（agonistic）に、おびただしい財貨を贈与したり、往々破壊したりして、富を誇示しようとするか。その様は病理的にすら映る。[9]

果たしてこうした衝動にアントーニオは駆られていなかったのかどうか。「商人王」アントーニオは、決定が即法的拘束力を帯有する場で、莫大な財に対し禁欲を通し、将来これを惜しげもなく他人に与える決心であることを居合わせた人々に声高らかに宣明する。そうすることにより、社会的名声を、経済的信用を今一層つのらせようとしなかったのかどうか。彼の行動が徹頭徹尾無私、無欲であると見なすのは、好意的に過ぎる観測だ。（法廷のドラマに見入る傍聴

人から讃嘆の叫びが澎湃としてあがる。演出で、そうした工夫も歓迎すべきだ。アントーニオ役者がここで昂然たる表情を浮かべるのも効果的であろう。）

およそこの世に一方的なる贈与程、受け入れ難いものはない。何かを贈られ、それっきりという人は、社会通念上、非常識極まる。贈った側には何かしら怨恨めいた感情が生れもしよう。贈与と答礼は不可分に結びついている。実はモースの贈与論の要諦はむしろこの点にある。給付は反対給付を不可避的に伴う。

われわれが今問題にしている贈与は、こうした考察からすれば変則的であることがたやすく看取されよう。返礼は眺望されない。先入見かも知れないものの、ロレンゾーのうちに、ただ受け取るだけで、与えることなどつゆ思わない人間をしかわれわれは見出さない。

もとよりアントーニオが見返りのようなものを当て込んでいないのは確かだが、問題はそういうことではない。ここでは、この恩恵の一方的性格こそが非とされねばならない。一方的なるが故に、贈与の精神にそれが反している消息こそが問われねばならない。百歩譲って返礼をしようという気持ちを起こしたところで、そうなし得ない程の贈り物をロレンゾーは贈られてしまったのである。一般的に、こうした情況こそが贈与者の名誉の極みである。ポトラッチの極点である。[10)]

本贈与が時限的なのは、つまり、譲渡は即刻ではなくシャイロックの死をまって、始めて実行されるのは注意をひく。譲渡者の真意はしかとはつかみ難いが、この付帯事項は本件に遺産相続の性格を添えている。自らを死んだシャイロックに仮託して、アントーニオはまるでこの若い男の父親でもあるかのような立場で、遺産を譲り渡す。何の前触れもなく、一方の当事者が蚊帳の外に置かれたまま、アントーニオはロレンゾーと養子縁組を決めてしまったかのようである。いかに財政的に有利な話とはいえ、覇気のある独立独歩の男なら、このように勝手な真似をされたら不快感を禁じ得ないのではあるまいか。[11)]

シャイロックの財産処理はポーシャが厳かに示した原案通りとはならなかった。再配分がなされることとなる。既に触れたように、アントーニオにより財産の他の半分はシャイロックのもとに保全される。

こうした「温情と引き換えに」、アントーニオは「条件」を二つ持ち出す。一つはキリスト教への改宗。これは「ただちに」行われなければならない。

> もう一つは、この法廷で譲渡証書を書くこと、
> すなわち遺産のすべてを
> 婿のロレンゾーと娘に譲るとしたためるのです。
> The other, that he［i. e., Shylock］do record a gift
> Here in the court of all he dies possessed
> Unto his son Lorenzo and his daughter.（4.1.377，385-89）

法廷はアントーニオの申し立てを全面的に支持する。これら二つの「条件」に不服を唱えることは、被告にとって死を即意味した。恩赦の趣きで、異邦人法を犯した被告に極刑を免じたヴェニスの公爵は少々日和見的だ。その決定を事情如何では、撤回するにやぶさかでないようなのだ。公爵は言い放つ、「そうさせよう、いやだと言えば／いまここで申し渡した赦免は取り消す」（390-91）と。

シャイロック自身の取り分としてアントーニオが指定した他の半分についても、先と同じ計らいがなされた。この資産も遺産として規定、というより規制されたのだ。論理的連続性がここにはある。

法廷は専らシャイロックの財産が一方的に処分される場と化していた。シャイロックはここであたかも禁治産を宣告されてしまったかのようである。財産を自分では管理することが出来ないこの心神喪失者に、アントーニオが後見人として親切にも名乗り出、認容される。[12)]

財産の遺贈をシャイロックは指示される。アントーニオの行動には僭越の趣きが感じられる。はからずも取得した財産を彼がどう活用し、どう処分しようとも、基本的に誰人も容喙することは許されない。それとは明らかに次元を異にした事柄なのだ。いかにそれがアントーニオの仲裁の賜であるとはいえ、問題の財産は既にシャイロックの所有に帰している。その運用については、所有者の意向が何よりも尊重されねばならないはずである。アントーニオはシャイロックに理解を求めたりはしない。独断専行とはこういう行動を表すのであろう。アントーニオは越権行為を犯している。

「遺産のすべてを／婿のロレンゾーと娘に譲る」。シャイロックになり代わって、あるいは腹話術風にシャイロックの言葉を真似て、アントーニオは遺産相続につき、己が決定を法廷で開陳する。彼は娘夫婦の父親なのだ。実父の心情は完全に等閑に付されている。そうした中なされた取り決めで、彼はシャイロックの親権を簒奪しているようにさえ思われる。

紛れもなくヴェニスもその典型である家父長制社会にあって、父親の権力は遺産相続において究極的に顕示されたと考えられる。このように意志を全的に剝奪されたシャイロックは、家父長としての面目を悉く失わせられている。精神分析学上の用語を援用するなら、去勢されたのである。人肉契約でのシャイロックのひそかなたくらみの一つが相手の去勢であったと踏む向きもある。アントーニオは食えないやつかも知れない。彼は親切ごかしで、仕返しをしたのだ。これは実に、巧妙極まる報復だった。ある種の善意の人間ほど始末におえぬものはないという真実の、これは雄弁な実例だ。

おかしな話だ。原告は水を向けられるがまま、裁判に直接干渉し、ほとんど私怨を晴らそうとするかのように、被告にとっては厭わしい限りの義務を動議として出す。則が越えられている。原告の提言は、法廷において即刻無条件で採択される。厳正中立の精神をかなぐり捨てた法廷は、尊厳を失ってしまったのだ。

法廷は法廷以外の場に変じてもいる。法的拘束力を有する文書がそこで、急遽作成されようとするのだ。変則的であるのは、紛れもない。ここには明らかに逸脱がある。[13)]

人肉契約証書は正式には、公証人により作成された。シャイロックが抵当取立てを絶対の自信をもって姦しく要求出来たのは、振りかざす証書が商法上の実効性を備えていたからである。『ヴェニスの商人』では証書の成立に際して、公証人の介在が意識される。

商法に律された証書と同列に扱うことは出来ないながら、証書には違いない遺言書の作成に公証人の存在は不可欠であったはずである。手続き上大きな問題があると思わざるを得ないが、にわかに公証人が立てられる。ポーシャは命じる、「書記は譲渡証書を作［る］ように」“Clerk, draw a deed of gift”（4.1.393）と。「書記」とは言うまでもなく、これに扮したネリッサ。無資格であるのは言を俟たない。人肉法廷を司るためにポーシャが騙った「法学博士」程罪は重くなかろうけれど。公的な書類として、本遺言書が有効なのかどうか疑念が湧くであろう。判断停止がしかし、ここで求められている。

書記＝公証人の責務は、ここでアントーニオの発言の口述筆記に尽きていたと推察される。本証書には全面的にアントーニオの意志が反映されている。彼こそは専一的な作成者であった。書記＝公証人は代筆したまでのことである。

御当人のシャイロックは、名目的な存在でしかない。「異存はありません」“I am content”（4.1.393；拙訳）という返答を裁判官により強要されるこの問答無用の交渉で、シャイロックは名義人として書類に名を記すことだけを求められていたに過ぎない。

彼は体調不良を訴え、証書は後刻送り届けられたら署名すると約束し、許されて退廷する。必ずしも、仮病を使ったのではないであろう。彼の影は薄い。それもそうであろう。死後のことを思うよう、シャイロックは強制されたのだ。

死は彼の意識に突如上せられる。異邦人法の侵犯は本来死罪に相当した。シャイロックは幸運にも命を召されずに済んだ。しかしながら象徴的な地平で、本法廷において彼は死刑に処せられたと言えなくもない。悄然と法廷を去るシャイロックは、心なしか死の気配を漂わせている。

証書は現実に作成されなければならない。ユダヤ人の財産は死後、是非もなく然るべき筋に移譲されねばならないのだ。閉廷後時ならずして、ポーシャはネリッサにシャイロックの家を探し、証書を手渡し署名させるよう命じる（*Portia* “Inquire the Jew’s house out, give him this deed/And let him sign it”［4.2.1-2］）。面倒なことは何もない。自分の思惑とは無関係に他人が整えたこの証書に署名するだけで、シャイロックの遺産相続は完了するのである。ポーシャの命令は滞りなく遂行された。

ベルモントの館で、作品の終わり、指輪の騒動が落着した後、ポーシャは「私の書記からいい知らせがある」“My clerk hath some good comforts” とロレンゾーに話かける。

ネリッサ　ええ、これは報酬なしで差し上げましょう。
　さあ、どうぞ、あなたとジェシカに
　金持ちのユダヤ人からの譲渡証書、
　死後、遺産はすべて譲るそうです。
Nerissa.　Ay, and I'll give them him without a fee.
　There do I give to you and Jessica
　From the rich Jew, a special deed of gift,
　After his death, of all he dies possessed of.（5.1.289-93）

その作成に一応は公的にかかわった元書記のネリッサが証書を受領人に手渡す。そこには一貫性が認められる。ネリッサの言い回し "gift,/...of all he dies possessed of" は、アントーニオのそれ "gift/ ...of all he dies possessed" の反復でしかない。彼女は筆録した文言を記憶していたのであろう。

心なしか、彼女は本証書をまるで私物の貴重な品のように思いなし、それを自分の特別の親切心から譲り渡そうとでもしているかのようだ。この譲渡は無償である。「報酬なしで」彼女はこれを授けようとする。手数料の意であろうか、「報酬」がこのような場面で口にされるのは意外な気もする。よもや、金銭至上主義のヴェニスの倫理に彼女が感染したのではあるまい。

奇妙な話ではある。遺言書は当然遺贈者の生前に書かれるのであるが、それが被贈与者の手に渡るのは、あくまでその死後であるはずなのだ。遺産贈与の概要を、恩恵に与る者が予め知らされることは、絶対ないとは断言出来ない。が、遺言書そのものは、譲渡証書それ自体は遺言人亡き後始めて、遺言執行者のような第三者の手を通して当事者に交付される他ないのである。シャイロックは想定上、もはや亡き人なのだ。[14] ネリッサが行きがかり上、遺言執行人を務めた。

生命保険金の生前受け取りという今では珍しくない慣行とは、同日の談ではない。贈与者の存命中の遺産の贈与。形容矛盾ですらあるだろう。本遺産相続のこうした異例さは、シェイクスピア研究者によってほとんど認識されていない。

恩恵は、それに与る者から格別の感慨を誘う。ポーシャが口火を切り、ネリッサが実際に手交した譲渡証書を受け取る際、ロレンゾーは詩的感興を込めて感謝している。曰く、

　お二人はマナを降らせてくださる、
　飢えかつえた者の上に。（5.1.294-95）
　Fair ladies, you drop manna in the way
　Of starvèd people.

作者の側のアイロニーが感受されないであろうか。神の意志に従ってエジプトを脱出した古代イスラエルの民は、荒野で神が天から降らせた食べ物、マナにより餓えから救われた。深甚なる神学的含蓄がひそんでいるに相違ない旧約聖書のエピソードは、地上的、即物的変容を遂げる。親に背いてそのもとから逃げ出した子供夫婦（その仔細は後述するが）は、逃亡先の地で彼らを困窮から解き放つ恵みに与る。[15)]

神ならぬ、父親がこの恵みを垂れた。シャイロックこそが旧約の神に比定される行為をしたのだ。しかし、意図的なのであろうか、真の恩恵者は不在させられている。マナを降らせたのは、ポーシャとネリッサなのだ。あたかも、富の起源は、その獲得へのユダヤ人の罪深い関与の記憶は、一時（いっとき）なりと抹消されるのが望ましいかのように。

ロレンゾー夫妻が実際にマナに浴するのは、今ではない。シャイロックが死ぬ、いつとは知れない将来である。だが早、彼らは財産を既に譲渡され、自由にそれを使い得る身であるかのようだ。ここでも、シャイロックはもはやこの世の人ではない。

現実にはシャイロックは生き続けるであろう。蓄えを崩して行く生活を送ることになるのだろうか。それとも、キリスト教徒となったことで、キリスト教が厳禁する高利貸しは論外として、他の金融関係の仕事、あるいは商活動に就く道が開け、生計の足しにすることが出来るであろうか。後者の可能性は低いように思われる。というのも、ヴェニスを代表する有力者のアントーニオの命を危殆に瀕せしめ、ヴェニス社会を激震させたシャイロックは社会の敵としての烙印を押されたも同然なのであり、キリスト教共同体からは以前にも増して敵意と猜疑心を向けられるようになるであろうからだ。キリスト教徒が彼の顧客となるのは、極めて望み薄ではないであろうか。人肉法廷での彼の言動は、同胞の名誉を著しく損なう結果ともなった。シャイロックは打ちのめされたが、ヴェニスのユダヤ人社会の反応には複雑なものがあろう。彼らを相手にして円滑に商売を行うことが出来るとは限るまい。人肉抵当騒動が全く伝わっていないどこかよその地に移住する、換言すれば、亡命するという選択肢も想定されなくはない。が、今や終身管理下に置かれることとなった彼の財を厳密に掌握する上で、当局にとりこれは極めて不都合なはずである。彼は爾後死ぬまで、ヴェニスで暮らす他ないのではあるまいか。アウトサイダーであることを今更ながら痛感させられたシャイロックは、そうした境遇のまま生き続けなければならない。もっとも、ユダヤ人の彼がアウトサイダーでないような土地は、地上に存在しないとも言えるのだが。

この先何らかの形で収入を得、資産の目減りを少しでもなくそうとする努力などしかし、無用であろう。なるべく多くを遺そうとする通常の親の機微は、ここでは通用しない。それに、普通の生活を送れば、無職・無収入でも死ぬまで暮らして行けるばかりでなく、まとまった、否、むしろかなりの額の財産を相続させられる程に、シャイロックは既に富者であるように思われる。[16)] 普通の生活。反対に、捨てばちになって、それこそ娘と同じように散財に明け暮れるように彼がなる。その時は、当然財政的支出に制約が設けられることとなるに違いない。（それ

とも彼の経済は最初からがんじがらめに縛られることになるのであろうか。）

何事もなければ、かなりの遺産が残されるであろう。だが、異変は、非常事態は絶対に起こらないと断言出来るであろうか。

時代錯誤がテキストで犯されたらしい。アントーニオの進言でシャイロックは不承不承キリスト教に改宗させられが、こうした強制改宗はヴェニスでは稀であったとの由、異端審問が猖獗を極めた同時代のスペインでこそ似つかわしい光景だったようである。狂信に苛まれたイベリア半島に舞台が仮想的に移り変わってしまった観がなくもない。

真性なるキリスト教徒にシャイロックがなるという予想は、むしろ彼の名誉のためにも控えよう。同じ境遇に置かれた多くの同胞と変わらず、隠れユダヤ教徒、いわゆる「マラーノ」、「新キリスト教徒」の道を彼は歩むものと思われる。彼の行動はそれで爾後、異端審問所の不断の厳しい監視にさらされることになる。というのも、この猛悪な組織が専ら標的としたのは、マラーノであったのだ。審問によって信仰心の不純さが暴かれたマラーノにしばしば、如何なる酷薄な運命が待ちかまえていたかはよく知られている。不幸にも、検閲にひっかかり、例えば全財産を召し上げられる。シャイロックがそのような悲運に見舞われるというのは、杞憂とは言い難い。考えてみれば、人肉法廷で既に彼は似たような目に遭っている。本法廷で繰り広げられたのは、異端審問の一変奏であったとみなすのもそう的外れではないであろう。[17] 押しも押されもせぬヴェニス有数の市民と見受けられるアントーニオは、その信用と権力に物を言わせ、然るべき筋に働きかけ、かかる事態の出来を未然に食い止めるのが得策であろう。シャイロックの遺産贈与を取り決めた自身の威信を保つためにも。

結果的に空手形をロレンゾー夫妻は受け取る。譲渡の具体的な金額は、証書が引き渡された時点では不明であったから、記入されてはいなかったはずである。彼らは金額が不明の小切手を受け取ったに等しい。この贈り物が最終的に無の実態を露わにする時、悪質な瞞着にひっかかってしまったと憤ったところで、後の祭りである。

もう一方の贈与、アントーニオのそれですら万全ではない。既に見た通り、本譲渡についてアントーニオは「委託」を前提に話をしている。この「委託」、活用を含意している。当該部分は原文では、“so he［i. e., Shylock］will let me have/The other half［of his fortune］*in use*”（4.1.381-82；イタリックスは本稿筆者）。この財は死蔵されず、生業である海外交易につぎ込まれ、利殖がはかられる形勢にある。[18] 投資が成功するとは決まっていない。破綻も現実の脅威として、彼の企図を待ち構えていよう。先の経験はアントーニオの記憶に新しいはずである。「委託」された金をこのようにして失ってしまったところで、これは公金ではない以上、横領したことにはならない。アントーニオは背任の罪に問われることはない。ただ、アントーニオの善行は水泡に帰する。それに彼の体面に大きな傷がつく。その方が重大問題だ。本贈与については譲渡証書の手交はテキストで触れられていないが、シャイロックの遺言書と同時にそれが手渡されていたとしたら、被譲渡者にとって結局ぬか喜びとなっていたかも知れない。

ネリッサが差し述べた書類は正確には、“a special deed of gift”「贈与の特別な証書」（拙訳）と称されていた。意味深な気がしないでもない。しかし深読みは控えよう。

「証書」の意の “deed” には、「行為」の響きもあろう。本贈与行為の「特別」さが示唆されているようにも思われる。それはその主体者の人間的感情を全くないがしろにして行われたものである。親は絶対に不本意ながら、殊更（「特別」に）、仇をなした娘夫婦に財産のすべてを譲り渡すよう強いられたのである。その結果、公権力を後ろ盾にして放蕩娘夫妻は我知らず、親の祝福をもぎとる次第となった。

捜索も空しく、連れ戻すことが出来なかった娘をシャイロックは勘当するつもりだった、廃嫡を決心していたとしても不思議はない。しかし彼の意志は、阻まれる。折り合いを取ることが強要されたのである。和解が押しつけられたのである。和解はシェイクスピア喜劇にとって、多分どんな喜劇作品にとっても決して異質ではない。しかしながら、少なくとも親の側が死ぬまで拭い去ることが出来なかったであろうわだかまりを不問に付した、この強引な、しかも金の力に依存しているやにすら感じられる和解には違和感を覚える観客・読者がいるであろう。

本譲渡行為の特別さは、別様にも看取される。

遺産相続で実現されるのは、財の社会的交流である。シャイロックの財産は死後、特有の仕方で社会に還元されなければならない。ロレンゾーをその一員とするヴェニスのキリスト教社会に、どうあっても引き渡されねばならない。

財の環流が計られる。シャイロックの財産は、アントーニオが強迫観念症者の体で執拗かつ矯激に断罪した高利貸しを通して、理念上はキリスト教徒から彼がせしめた金から成っている。シャイロックがその正当性を確信しつつ長年実践して来た高利貸しは反高利貸しの言説においては、元金から産み出された余剰部分をかすめ取る営みとして断罪された。余剰部分は債務者から詐取されたと考えられた。シャイロックの財産は常習的な窃盗により築き上げられたものである。

シャイロックの金儲けは、いわゆる「汚い儲け」であった。因みに、精神分析学的には儲けは、換言すれば資本主義的営為において産み出される利潤は、「汚い儲け」に他ならない。[19] この汚さは肛門的スカトロジーに与っている。そしてかかるスカトロジーと本質的親和力を有しているのは悪魔である。ユダヤ人はこのような観点からも歴史的に悪魔と観念連合させられた。シャイロックの生業 —— それはユダヤ人にほとんど唯一許された、あるいは彼らが追いやられた生計の手段であったのであるが —— はキリスト教徒にとってこの上もなく汚い営為と映った。[20]

起源はけがれていようと、この儲け自体は、キリスト教徒のもとに戻されねばならない。社会正義が達成されなければならない。あるいは同じことであるが、復讐は果たされなければならない。

一旦シャイロックの財産の半分はヴェニス共同体に返還されようとした。実際最初の裁定に

従っていたなら、この金は国庫に納入されていたはずである。共同体の財とはならなかったこの財産に対し、私有を彼は認められる。が、キリスト教徒ロレンゾーと彼のお陰でキリスト教に改宗出来たジェシカに将来的に渡るよう取り決められる。駆け落ちした相手が同胞のユダヤ人であり、従ってジェシカが敢えてキリスト教に宗旨変えする必要がなかったとしたら、言い換えれば、彼らがキリスト教徒でなかったならば、こうした恩恵に浴することはあり得なかったであろう。熱烈なキリスト教信者であるアントーニオは、非キリスト教徒に財が流れる事態を回避すべく、シャイロックの遺産相続にかく介入したと考える根拠は十分ある。

富は転換されねばならなかったが、それはほとんど力ずくだった。シャイロックの財産を、ヴェニスのキリスト教徒は有無を言わせず、奪い取った。それは、法廷で合法的にせしめられた。適法化されてはいるものの、この遺産譲渡は語弊を恐れずに言えば、強奪に等しい。法廷で強権が発動され、キリスト教徒たちの合議によって、ユダヤ人の財産はよろしくキリスト教徒の富に変換されるべき旨、決定された。[21)]

ヴェニスの法廷が被告シャイロックに呑ませた遺産贈与の決定は、彼の邸で泥棒が働いた乱暴狼藉の免罪につながった。正式の相続人を遺贈者が何かの罪で訴える。笑止の沙汰だ。親は非道の娘夫婦を許したからこそ、財産を亡き後譲るのである。無法すらかいま見られるこの取引によって、本来、法廷での遺産相続の決定とは関係なく断罪されるべきである彼らの経済上の不法行為は、結局問われないことになる。

ここで彼らの非行の跡をたどらねばならない。その過程で、上述した「強奪」が予行されていた事実をわれわれは思い知らされるであろう。

不覚にもシャイロックは家を一晩あけたが、その留守中に娘と金(かね)が消えていた。キリスト教徒のロレンゾーと娘が恋人同士の風情でゴンドラに乗っていたことが、必死で娘を捜すシャイロックに伝えられる（2.8.1-11)。[22)] シャイロックが半狂乱するのも、無理はない：

> あのユダヤ人の犬め、往来で吠えまくったんだ、
> 「俺の娘！　ああ、俺の金(かね)！　ああ、俺の娘！
> キリスト教徒と駆け落ちした！　ああ、俺のキリスト教徒の金！……」(14-16)。
> ...the dog Jew did utter in the streets:
> “My daughter!　O my ducats!　O my daughter!
> Fled with a Christian!　O my Christian ducats!....”

これはヴェニス市民ソラーニオの実況報告である。迫真の技だ。ここでソラーニオはシャイロックの声帯模写を実演している観がある。ソラーニオはシャイロックの取り乱し様に興じている。この男には、「ああ、俺のキリスト教徒の金！」と絶叫するシャイロックの姿が、殊の外面白可笑しかったであろうか。けだしソラーニオは核心を突いていた。シャイロックの財は「キリス

ト教徒の金」から成るものであるが故に、キリスト教徒から詐取された富であるが故に、キリスト教徒により盗み去られたのだ。キリスト教徒のソラーニオは、これに続けてあるいは快哉を叫んだかも知れない。[23)]

整合性がここにはある。不埒な窃盗は論理に適っている。そしてそれは、われわれが論じている遺産贈与を照射している。この贈与が司法的に是認されたものとはいえ、深層では財の強奪とさほど変わらない真実を、浮かび上がらせる。巧妙に隠蔽された非法なる譲渡の内奥を、正に白日の下にさらしている。件の譲渡の写実的な予型が、観客•読者に突きつけられている。法廷で財に対し犯された大がかりな侵害行為は小規模ながら予め、直解的に実行されていたのだ。

「身体」“person” と「財布」“purse” の言語遊戯めく一体性（1.1.138）が主筋に通底する意匠の一つであることは、先行論文で論及した。人と金（かね）は等価である。この公式はジェシカとロレンゾーの駆け落ちを扱った副筋でも有効だ。又しても、語呂合わせは健在だ。盗み出されるのは「金（かね）」“ducats” のみならず「娘」“daughter” でもあるのだ。[24)] シャイロックが「娘」よりも「金（かね）」に執着しているように見受けられるのは彼の非情さを物語っていようが、見方によってはその反応は喜劇的であると言えまいか。生身の命ある存在と無機質の「物」が並列され、程度の差こそあれ、その喪失が等しく嘆かれている状況は、滑稽であるはずなのだ。シャイロックは我を忘れている。惑乱、いや錯乱はたやすく止みはしない：

> 「裁判だ、法律だ、俺の金、俺の娘！／封印した袋、封印した金袋を二つとも、／ああ、倍額の金貨が詰まったやつが盗まれた、俺の娘に！／それに宝石、二個もだ、値の張る宝石を二個も／娘に盗まれた！／裁判だ！ —— 娘を見つけてくれ、／宝石を持ってる、金貨もだ！」（2.8.17-22）

ソラーニオは「ユダヤ人の犬」を巧みに演じている。臨場感あふれる語り口で、外道のユダヤ人の、嘲笑に値する悲嘆振りを表現している。その演技には嘲弄が露骨に見られる。（この報告に歪曲を疑う評者もいる。考え過ぎであろう。それに、よしんばねじ曲げられていたところで、その基調は変わらないはずである。）

娘と金の同一視は、文明社会の倫理観からすれば反発を買おう。しかしある種の家父長制社会では娘は財産の一部なのであり、その限り金と同様、貴重な財を構成していた。父親にとって、娘は婚姻のネットワークで連結していた社会で不可欠の交換財だった。その財への父親の権利は基本的にして、枢要であった。従って、娘が見知らぬよそ者の男に盗み去られることは、財産権の由々しき侵害に相当した。シャイロックが「裁判だ、法律だ」と騒ぎ立てるとき、事由の中にかかる侵害を入れることは、あながち突拍子もないことではなかったかも知れないのだ。[25)] ヴェニスの、あるいはヴェニス以外のイタリアの諸都市のユダヤ人共同体で、適齢期の婦

女を媒介とした相互の社会的交流が見られたであろうことは、想像に難くない。レヴィ＝ストロースが大著『親族の基本構造』で縷述している婦女の交換に支えられた互酬的な婚姻の慣行が存在した、と推測するのは本篇に描かれたヴェニスの現実から乖離することにはならないであろう。[26)]

かかる社会的交渉が成功し、娘ジェシカはふさわしい相手と結婚する。あるシェイクスピア研究者が推量しているように、彼の富は子孫に継承されて行き、家系は栄える。シャイロックはそのような信念を堅持し、財の蓄積に腐心した。財政的富裕と家系の繁栄は彼のうちにあって、不可分に結びついていた。彼の望みは然るに、娘と金を理不尽にも盗み出されることで、潰え去る。[27)]

盗み出された娘を取り戻す必死の努力がなされはしたが、裁判は結局起こされなかった。捜索は徒労に帰したが、被害者が法律に訴えることはなかった。裁判や法律はしかし、人肉法廷に変成した。娘を無法にも奪われたことが、人肉抵当取立てを主張する訴訟につながったのは明白である。大切な血肉、心臓とみなしていた娘を取られたが故に、当初の契約では任意の部分からであったはずなのに、アントーニオの心臓近くから彼は一ポンドの肉を切り取ろうとする。このことは既に、言われている。

訴訟が実行に移されなかったのは、やむをえなかった。シャイロックが娘と金を盗み出したかどで、キリスト教徒の青年ロレンゾーの仕業と確信して、当人を仮に訴えたとしても、裁判の争点は必ずしも明確ではなかったであろう。窃盗の罪。が無理があるのだ。というのも、シャイロックの上の激昂で、娘の立場がめざましい変化を見せている事実は看過出来ないのだ。当初娘は盗み出されたと考えられた。その意味で窃盗の対象と認識された。が程なく、娘は本行為の実行者として、父親により非難の矛先を向けられることになる。娘が金を盗んだのだ。ロレンゾーは直接手を染めてはいない。傍目には笑止に聞こえるシャイロックの叫びは、複雑な思いを内包していたであろう。娘を彼は被告席に据えねばならない。肉親を相手取った経済的略奪行為の告発は、相当困難を伴うであろう。奪われた金は、前倒しされた持参金として認定される余地も残されている。これは問題を複雑にする要因となるであろう。住居の不法侵入。起こり得る訴訟に予め備えてのことであろうか、これをロレンゾーは避けた。せいぜい、恐らく成人に達していない娘を拐かした罪。微妙なのは、娘はロレンゾーの責任を否定するであろうが、未成年者のこうした情況での供述に信憑性がどの程度認められるかということである。結論からすれば、事由は決め手に欠ける。決定打がない。訴えを当初から却下される、つまり門前払いをくわされる確率は非常に高かったと判断せざるを得ない。最初から頓挫を運命づけられていたと覚しい告発は、既に見た通り、人肉法廷でおくびにも出されない。この問題は、そこで暗黙のうちに解決済みとされた。

被害者にとっては、恥さらしな現実があった。実の娘からあのような仕打ちを受けたのである。不面目の極みだ。ただ、盗まれたのが単に金（かね）であったなら、事は単純であったろう。「宝石」

“jewels” が、貴重な「石」が二個、金ともども盗み出されたのだ。被害に会った二個の「石」の性的含意は透けている。ソラーニオはシャイロックの真似をしつつ、邪悪な悦びを禁じ得なかったのではあるまいか。娘は「宝石を持ってる」。「娘を見つけてくれ」と悲鳴にも似たわめき声を往来で立てるこのユダヤ人が本当のところ何を取り戻したがっていたのか、ソラーニオには得心が行っていたであろう。ヴェニスの年端のいかぬ少年たちは、耳年増であったのだろうか。「ヴェニス中の少年たちがあとを追って／石だ、娘だ、金だとはやし立てる」“Why, all the boys in Venice follow him,/Crying his stones, his daughter, and his ducats” (2.8.23-24；拙訳)。[28] 現場を同じく目撃していたと覚しいサレーリオは、こうソラーニオに合いの手を入れている。シャイロックの物真似をしたのは、ソラーニオ一人ではなかったのだ。(ソラーニオとサレーリオ、サレーリオとソラーニオ。区別がつきずらい、二人でようやく一人前といった形象。ヴェニス版ローゼンクランツとギルデンスターン、ギルデンスターンとローゼンクランツ。デンマークの臣民とは少々違って、これらヴェニス市民は名前すら紛らわしい。こうした二人組は、やがて不条理の現代文学で馴染み深いキャラクターとなるであろう。)[29]

娘に金品を持って行かれた。不在時に起こった不祥事であってみれば、この事実はすぐにはつかみ得なかったと思われる。これは直感であったろう。しかし、図星だった。筋立てをわれわれは先取りしたようだ。事件の模様を最初からたどってみよう。

はかりごとの実行には、邪魔が入った場合に備えてであろうか、ロレンゾーの悪友たちサレーリオとグラシアーノも加勢している。街はカーニヴァル。これら三人の男たちは、特有の仮面をつけている。更には仮装すらしていたかも知れない。(ジェシカはロレンゾーを声でそれと知るばかりである。外見を彼が隠している以上、無理もない。)祝祭の最中、これら三人の変装した男たちがユダヤ人の家の前で立ちつくしていたところで、怪しむ者は誰もいない。誰かに不審がられ、声を掛けられたにしても、祭りの趣向の一つとでも言い抜け出来たであろう。逃走を円滑にするため、ジェシカも姿を変えている。男の子に扮しているのだ。この異性装は、カーニヴァルと軌を一にしている。否、いでたちばかりでなく、彼女の愛の冒険そのものが祝祭の性格を帯びていると言って、さしつかえないであろう。彼女は変身している。そして別人格になっている。別のジェンダーを選び取ってもいる。彼女は、いや彼は、ロレンゾーの松明持ちだ。悪事は闇夜を見計らって決行された。あたりは暗かった。とすれば、外観を変に装う必要はなかったであろうか。カーニヴァルでなかったなら、仮面をつけるまでもなかったであろうか。

二階のバルコニーに姿を現したジェシカは、そこからロレンゾーに向け小箱を投げ降ろす。宝石を含む多額の金品が詰まった小箱である。階下まで運ぶには重過ぎたのであろうか。言うまでもなく、この趣向は本篇の霊感源となったクリストファー・マーロウ作『マルタ島のユダヤ人』の一場面に遡及する。ジェシカの対手、ユダヤ人の娘アビゲイルが、本来自分の家のものである財貨を階上から下に投げ落とすシーンに鼓吹されている。対照は著しい。アビゲイル

は、シャイロックの先蹤と言うべき父親バラバスを欺き、背いてかかる行動をするのでは決してない。命じられがままに、あくまで父親のためにそうするのである。ジェシカのように恋人のもとにではなく、父親に向かって彼女は金袋を投下する。シェイクスピアはオリジナルを思い切って改変した。[30)]

もっと金を取って来ると言い残し、彼女は一旦姿を消す。彼女の振舞いをグラシアーノは、ユダヤ人には思われない程殊勝なものと取る：「気立てのいい娘だ、あれはユダヤ人じゃない」“Now by my hood, a gentle and no Jew!” (2.6.51)。嘲笑が聞き取られないであろうか。無恥以外の何ものでもない行動のどこをとらえて、グラシアーノはジェシカをこう評するのであろうか。

恥を感じてはいた。ただ、それは男装に対する羞恥の念でしかなかった。みてくれしか彼女は気にしていなかった。倫理心の放擲をカーニヴァルに帰することは多分出来ないであろう。

親一人子一人の家族で、老いた父親を最後まで欺き通して捨てる。それどころか、家出する際、自分の家で泥棒行為を働く。倫理に著しくもとるこのような行状を心の片隅でもやましく感じていたのなら、望みはあろう。彼女はここで罪人の意識を持ち、改悛の情を示すべく（マグダラのマリアよろしく）ローソクをかざしている。本物のローソクではない。彼女が手にしている松明がその代用なのだ。(趣意)図像学的にシェイクスピア劇を論じた研究書で、あるシェイクスピア批評家は、そのように論じている。読み込みが過ぎるというものだ。彼女が自分のしでかしたことの重みを反省するようになるとしたら、それは遙か先のことであるに相違ない。[31)]

「あれはユダヤ人じゃない」。確かにそうなのだ。というのも、われわれは断言出来る。家族を大切にし、取分け父親と深い情愛の絆で結ばれているユダヤ人の娘は決してこのようなことを仕出かしはしないと。行動と考えのすべてにおいて彼女はユダヤ人の娘の常から遠くかけ離れていると。シャイロックはユダヤ人にあらざるユダヤ人であると、その表象に異を唱える批評家もいるが、同じことはジェシカについても言えるはずだ。[32)] 他の作家、例えば、スコットは代表作『アイヴァンホー』で、レベッカを理想的なユダヤ人の娘として描いている。否、同時代のアビゲイルはこの点、レベッカと遜色ないであろう。シェイクスピアはなぜジェシカをこのように造型したのであろうか。[33)] ならず者のグラシアーノは、問わず語りに真理を語っていた。[34)]

ロレンゾーは言葉を継ぐ、

> 誰がなんと言おうと、俺はあの娘を心から愛している。
> あの娘は賢い、俺に判断力があるとすれば、
> そして美しい、俺の目に狂いがなければ、
> おまけに忠実だ、これはあの娘自身が証明している。

だから賢くて美しくて忠実なあの娘にふさわしく
この変わることのない胸に抱いておくんだ。(2.6.52-57)

「俺はあの娘を心から愛している」。情熱は本物なのであろうか。ジェシカを愛する理由をロレンゾーは一つ一つ確認している。「判断力」や見る「目」の正しさを前提として、ジェシカの美質を挙げて行き、この愛の合理的なることを納得している。その上で、「変わることのない胸」を表白している。

始めに結論ありき。しかし、心もとないのだ。それは合理的に証明されなければならない。ロレンゾーにとって、結論はあたかも無理して出されたかのようだ。だから、論証が必要なのだ。

本篇と年代的に極めて近い作品『ロミオとジュリエット』で印象深い二幕二場のバルコニーの場面。それを彷彿とさせる情景がここでは現出していた。が両者の隔たりはあまりに大きい。恋するロレンゾーは恋人が投下した金品入りの小箱を受け止めつつ、変わらぬ愛を誓うのだ。バルコニーのあるこの家は、愛するジェシカが住む家というよりは、ロレンゾーの言いぐさでは「舅のユダヤ人の家だ。」(“Here dwells my father Jew.” [2.6.25]) この家は金蔓だった。正しく「舅のユダヤ人」から彼は遺産を受け継ぐ。期するところがあったのではあるまいか。

「どうやって父親の家から連れ出すか、／どれだけの金や宝石を持って出るか、／仮装用にどんな小姓の衣装を用意してあるか ――」、ロレンゾーがグラシアーノに事前に語っていたところでは、すべて段取りはジェシカの方でしたという(2.4.29-32)。[35] 上の引用で、ジェシカの「忠実」さをロレンゾーはほめていた。悪事の概要はロレンゾーが立て、それを実践に移す上でジェシカが主体的な役割を果たしたということなのであろう。

グラシアーノ相手にロレンゾーは述懐していた：「万一あのユダヤ人の親父が天国に行けるとすれば、／ひとえに優しい娘のおかげだ、／不幸があの人の行くてをさえぎることのありませんよう、／もっともこの不幸ってやつ、言いがかりをつけて邪魔に入らないとは限らない、／信仰心のないユダヤ人の娘だからってな」(2.4.33-37)。「優しい娘」“gentle daughter” の含蓄は、もはや説明を要しない。グラシアーノの先の感嘆は、あるいは悪友ロレンゾーの御託宣に触発されているかも知れない。「信仰心のないユダヤ人」であってみれば、「ユダヤ人の親父」が天国に迎え入れられるなどというのは先ず考えられない（あるいは考えたくもない）が、仮にそうなるとすれば、ただただ惜しげもなく「金や宝石」が入った小箱を投げてよこすこのユダヤ人ばなれした娘のせいなのだ。父親の霊的救済が可能であるとするならば、それは娘の善行によりもたらされるのだ。ロレンゾーはほとんどそう言ってるかのようだ。われわれが先行論文で考察した「経済と贖いの機序」は、ここでも作用しているような気がする。彼にとってユダヤ人は不吉にして不運だ。罰当たりな民人であるからか、不幸がユダヤ人のなすことについて回る。ロレンゾーは、他のすべてのヴェニス市民と違わず、反ユダヤ主義者だ。

「信仰心のないユダヤ人の娘」なる生得の条件を脱却し得ないジェシカは、ユダヤ人に対する偏見にとらわれたこの相手とうまくやって行けるのであろうか。はた又、この条件故に、彼女はこれからも絶えず不運をかこたねばならないのであろうか。憂うべきは将来に限られない。過去も然り。例えば、ロレンゾーのような男と邂逅してしまったという不運。彼女は既に、幸運に見放されてしまった……。

この男の品性が如実に現れているエピソードがある。彼は、実は遅れてやって来た。そのことを詫びてであろうか、「君たちが人妻を盗み出したくなったら、そのときは／俺だって同じくらい延々と待ってやるよ」、とグラシアーノらに言っていた。(2.6.21-24)「延々と待ってやる」。相当待たせたということなのであろう。「心から愛している」娘と結ばれたいがため、彼はかかる冒険を企てたのではなかったか。示し合わせた時間に主人公が遅刻して、計画が不発に終わる。あるいは露見して、娘を連れ出すのは以後事実上不可能になる。様にならない。ただ、だらしなさというより、熱意の欠如こそが問題であろう。「愛」はもはや冷めかかっているのである。このことは次稿で立ち入って考えるつもりである。ここでは、「人妻を盗み出」す云々の軽口ともつかぬ言葉を閑却してはならない。この男は性的な倫理感を持ち合わせているのであろうか。人妻ならぬ生娘のジェシカは、この程度の男に「盗み出」されようとしていたのだ。

「最近彼［シャイロック］の娘を盗み出した男」(4.1.383-84)。アントーニオの言い回しが再び、思い起される。この表現がその冷笑的な響きで聞く者の耳朶を打つ。そのような演技も悪くない。

婦女を盗む。そうした行為には経済的な契機がまつわりついている。レヴィ＝ストロースの思想に必ずしも準拠せずとも、一般論として婦女は家父長にとって財産だった。娘だけではない、妻もまたそうである。従って、妻を盗み出されるとは、夫にとって他の男により財が侵害されるということである。ロレンゾーが言い及んでいる軽佻浮薄にしてやくざな目論見は、聞き流してはなるまい。ジェシカを盗み出す時、ロレンゾーは娘の父親に対しいかなる行為を働いているのか、あるいは直感するところがあったのではあるまいか。事後的に、アントーニオもその奥底を察知したように思われる。[36)]

娘と同じくらい、あるいはそれ以上にロレンゾーが熱望したのは投げ降ろされた小箱であった。象徴的な光景だ。富は上から降って来たのだ。マナの恵みは予行演習されていたのだ。実際ここでのロレンゾーが「餓えかつえた者」であったのは、容易に察せられる。定職に就かず、資産もなく、貴族の庇護者もいない自称詩人（世に自称詩人程始末におえぬ人種はいない）のロレンゾーは、本質的に無一物の身であった。常習的な寄食も疑われる。ジェシカとの結婚の誘因で経済的なものが占めていた比重は決して小さくなかったに違いない。彼が fortune hunter であったことを否定するのは難しい。小箱をキャッチする時、彼はどのような表情を浮かべていたのであろうか。

しばしば喜劇の趣向として、財産目当ての結婚が構想されるのはよく知られている。この慣

わしは文学作品では往々、滑稽なものとして描かれる。しかしながら、ロレンゾーの姿に反感を覚える観客・読者はかなりいるのではあるまいか。バッサーニオによる嫁取りの主要な動機がポーシャの夢のような富であるのは、隠れもない。が彼はその貴族的な風格のせいで、卑しくはない。当時の貴族にあって、財政的な理由に基づく政略結婚は通例であった。身分の上でも、そして品格の点でも、貴族からはほど遠いロレンゾーはバッサーニオの二番煎じだ。バッサーニオの行動の醜い部分を引き受けている。ロレンゾーの求婚はバッサーニオのそれの戯画であるように思われる。喜劇の低俗なヴァージョンをわれわれは見させられているのである。

「俺のキリスト教徒の金！」は、奪い去られた。盗み去られた他の貴重品も含め、シャイロック自身が列挙しているところに従って、実際盗難に会った品目を吟味してみよう。フランクフルトで買った一個二千ダカットのダイアモンド。「そのほかにも高価な、高価な宝石」。サレーリオが言っていたところでは、二個の宝石が持ち逃げされたのだが、ここでは個数は示されていない。もっと多いのかも知れない。これは遺漏であろうか。サレーリオはこの極めて高額のダイアモンドには触れていなかった。金袋二つは逆にシャイロックの方で話題にしていない。盗難目録の齟齬はどう説明すべきであろうか。明細にはファジーな部分がある。

被害者の反応はエスカレートする。ダイアモンドの喪失は当然「骨身にしみ」たが、彼は敢えてそれをユダヤ民族に降りかかった前代未聞の呪いのようなものと形容している。個人の財政上の損失が民族の受難にも匹敵する不幸と、彼には感じられるのだ。彼は娘の死を願う。「ただし耳に宝石をぶら下げたまま」死ぬことを。いっそ、自分の足下で、棺桶に納められてしまって欲しいと思う。「ただし持ち逃げした金貨ごと」。(財政的な但し書きがついているのは、いかにもシャイロックらしい。)サレーリオが伝える狼狽したシャイロックには、気の毒にと思わせるところがあった。可笑的でもあった。妄執の観をすら呈しているここでの彼の取り乱しようは、人非人もさもやのところがある。これは独白ではない。家出人捜索を依頼した同胞の友人テューバルの前で、ぶちまけた感情だったのだ。(3.1.79-85)[37]

こだわりは特異だった。彼は「損の上塗り」に耐えられない。「盗っ人にしこたま持ち逃げされ」ただけでは済まず、「その盗っ人捜しにしこたま使」わねばならないのが我慢ならない。捜索にかかった金は無駄だった。盗っ人は捕まらなかったからである。何かにつけて、出費にヴェニス市民が執拗な関心を示す本篇でお馴染みの光景が、ここでも繰り広げられている。憤りはやまない。こんな目に会って「埋め合わせもできなきゃ腹いせもできん。不運という不運が残らず俺の肩に降りかかってきやがる。溜め息という溜め息はみんな俺の口から出る、涙という涙はみんな俺の目から流れる」。(3.1.86-91)この世で自分程不幸な人間はいない、というのがシャイロックの言い草だ。特有の視角からすれば、こうした悲嘆の模様は喜劇的とみなされよう。

後に続くテューバルとの掛け合いには、紛れもなく喜劇の妙趣が感受される：

テューバル　いや、不幸な人間ならほかにもいる ―― アントーニオだって、
ジェノアで聞いた話なんだが ――
シャイロック　なに、なに、なに？　不運、不運？
テューバル　船が一艘難破した、トリポリから戻る途中で。
シャイロック　神よ、感謝します、ありがたい！　本当か、本当か？
テューバル　難破で命拾いした船乗りから聞いたたんだ。
シャイロック　ありがとう、テューバル、いい知らせだ、いい知らせだ。
ハッハッ！　そうか、ジェノアで聞いたのか！
テューバル　あんたの娘、これもジェノアで聞いた話だが、
一晩で八十ダカット使ったそうだ。
シャイロック　貴様、よくもこの胸を短剣でえぐったな ――
俺の金貨も見納めだったか ―― いっぺんに八十ダカット、八十ダカット！
テューバル　ヴェニスまでアントーニオの債権者たちと一緒だったんだが、
みんな言ってたよ、あの男は破産するほかないって。
シャイロック　いやあ、嬉しい話だ ―― やつを苦しめてやる、
責めさいなんでやる ―― 嬉しい話だ。
テューバル　債権者の一人が指輪を見せてくれた。
あんたの娘から猿一匹の代金として受け取ったんだそうだ。
シャイロック　畜生、あのドラ娘が！ ―― テューバル、貴様、
俺をとり殺す気か ―― ありゃ俺のトルコ石だ、女房のリアから
もらったんだ、まだ俺が独り者だったころだ。荒野一面の猿と
引き換えでも手放せやせん。
テューバル　だが間違いない、アントーニオは一巻の終わりだ。
シャイロック　うん、そうだ、そのとおりだ ――（3.1.92-118）

テューバルはシャイロックを手玉に取って楽しんでいる。自分の手のひらで踊らせている。相手にとっていい知らせと悪いしらせを交互に伝え、一喜一憂させている。面白い程、それは彼の目論見通りだ。シャイロックには操り人形の趣きが否められない。アントーニオの不幸を痛快がり、娘の常軌を逸した遊蕩に激昂するシャイロック。テューバルに操られるままに、彼の感情はこれらの両極を振り子のように振動する。彼がさらしている体たらくは、ベルクソンが理論化している笑いの現象を彷彿させる。それは「放心」している人間が見せる「自動現象（オトマチスム）」に近似している。[38] 望ましくはいかにもユダヤ人らしい俳優がこの場面を、ユダヤ人の芸人が得意としたヴォードヴィルの体で、演じる。一興であろう。[39]

敵の不幸はそのままにしておこう。悪い知らせの方は、シャイロックならずとも聞き捨てに

ならない。一晩八十ダカットもの金を使った娘。シャイロックがアントーニオに融通した問題の三千ダカットは、本篇で金銭的秤量の有力な参考額となっているとおぼしい。八十ダカットはその三千ダカットの四十分の一近くにも相当する。[40] 何に費やしたかは分からない。賭け事にでも手を出して、すってしまったのだろうか。金持ち振りを見せつけようと、投げ与えるように人にめぐんだりしたのだろうか。一晩ということであるから、一日では費やされた金は当然、八十ダカットを上回る。上に見た通り、ジェシカは一個二千ダカットもする高価なダイアモンドを盗み去った。仮定を一つしてみよう。彼女はこれをこの値で売却する。そしてそれを一日八十ダカットも使う遊興三昧の生活に充てる。とすれば、一月もせずにダイアモンドは消えてしまう勘定になる。シャイロックはこのダイアモンドについては「消えちまった」“gone”。(3.1.80)と言って、憤慨していた。(シャイロック自身の言葉を信じるなら、彼はこれをドイツのフランクフルトで手に入れたという。シャイロック家は元々、ドイツとゆかりがありそうな気がする。)こんな調子で散財を続けたなら、金銭的に無軌道な生活に浸ったなら、ベルモントの館に迎え入れられた時点で、ジェシカ夫婦が財政的にどのような状況に置かれていたか察するに余りある。ロレンゾーの言葉「飢えかつえた者」には切迫力がある。

どこまでも吝嗇家の高利貸しが蓄えた富を湯水の如く使う蕩児の娘。これは皮相的には、喜劇の枠組みに収められて然るべき意匠である。類型がそこには認められる。ただ、シェイクスピアは類型をそのままにはとどめず、人間へと洗練した。ジェシカはここで人間的な弱点をさらけ出している。

堰を切ったように、彼女は金を放出して行った。それは、彼女がそれまで堪え忍ばされて来たと思われる財政上の禁欲への反動であったと察せられる。反面、正しく箱入り娘であった彼女は、市場での物の価格、物価には全くと言っていいくらい疎かったであろう。おぼこ娘の笑止なる失態。笑いがあるとすれば、それは憫笑であろう。場合によっては、あけすけな嘲笑。

野放図な奢侈、破天荒な支出。彼女のかかる振舞いは壮大な物質的潤沢の魅惑を発散させているという解釈もある。無下には退けられないであろう。消費のカーニヴァルを彼女は楽しんだとも言える。ある面からすれば、彼女はポトラッチを実践したとも推測し得る。

現実はしかし、あくまで悲しい。愚かしいことこの上ない濫用で、彼女は訳もなく貴重な財を失ってしまった。これが惜しまれるのは、事態の進展如何では、この財に対し事後的に彼女が権利を獲得し得たと考えられるからである。これは娘がやがて授けられていたはずの婚資だった。了承も取り付けずに、父親に前倒しさせた。授受が独りよがりで性急に過ぎた。それだけのことだったのだ。心が再び通った父と娘がそう了解する時が来ないとは限らなかった。親子の再会が果たされたとしても、察するに、赦しは至難の業ではあるまいか。

『ヴェニスの商人』には旧約聖書がよく似合う。本稿で既に引き合いに出したが、他にも意味深な暗合が見られる。ここでは、ラケルの窃盗の挿話に注目してみよう。ラケルは愛するヤコブと連れ立って、父親ラバンのもとから脱走する際、ひそかにその守り神の像を盗み出した。

父親は即捜索を開始する。ジェシカの話とこれが酷似しているのは、多言を要しない。シェイクスピアは間違いなく、この故事を踏まえている。ラケルの先例を引き合いに出してジェシカの行為を免罪にしようとする読み解きもあるのは、それで、一応うなずける。着眼はそれなりに評価出来よう。しかし、やはりいただけない。ジェシカが父親の財に対して臨んでいる粗略、粗暴な態度。父親の守り神の像に接するラケルには、それは無縁のものであろう。ジェシカは盗みのみならず、盗んだものをはなはだしく蔑ろにしたその不謹慎さをも断罪されるべきである。シェイクスピアは旧約の印象深いエピソードに依拠しつつ、それを現代風に仕立てている。その貶価された異本を差しのべている。つまりは、それをもどいている。ジェシカの行為をラケルの事蹟との正確な類同物と受けとめ、それを正当化するのは、物事の一面をしか見ていないことになろう。それに、ラケルがしたこと自体、非難されるに値するはずである。ジェシカ免罪の根拠とは本来、なり得ない。[41]

両者の類比にもっと立ち入るなら、ラケルの守り神の像はジェシカが盗み出した金品全般とではなく、そのうちの「指輪」と観念上連合していると言えるであろう。ジェシカがこれを処分したその仕方こそは、激しく糾弾されなければならない。

これは、ジェシカの亡き母親リアが父親に贈った婚約指輪である。[42] ここには本篇で恐らく唯一感動的で意義深い贈与が認められる。人間的な、あまりに人間的な贈与のこの証しを前にして、われわれがこれまで論じてきた贈与はそのいびつさと異様さ、そして非人間的な特質を露わにする。指輪は憐れ、取り戻す術なく失われてしまった。[43]

言いしれぬ感慨を込めて、シャイロックはこれを偲び、その喪失を悲憤慷慨する。特別の思い入れがあったのであろう。『リア王』のリアの場合同様、彼の娘は孫程にも若い。晩婚だったはずである。それだけひとしおこの贈り物が彼にはいとおしかった。シャイロックの妻リア（Leah）。共にヤコブの妻となった二人の姉妹のうち、「顔も美しく、容姿も優れていた」妹のラケルとは対照的に、「優しい目をし［た］」と形容されている姉のレア（Leah）を彷彿させる。[44] シャイロックがこうした連想を誘う女性と結婚している事実は、シャイロックにも婚約していた時代があったことと同じくらい、意外だ。それは又、シャイロックの人となりのある面をうかがわせるものでもあろう。[45]

リアの誠実な贈り物。リアは指輪を例えば母親から譲り受けたとも考えられる。あるいは自身で購入したのであろう。そうであっても、その値段はここでは問題にならない。時価も問うにはあたらない。金銭的価値を絶対的に超越した次元に与る品であるからだ。象徴的にも、ジェシカは代価として現金を受け取ってはいない。

同様の贈り物をジェシカはしていないように見受けられる。どうしてなのであろうか。レアがシャイロックに寄せた愛。そのような愛、真情あふれる愛を彼女はロレンゾーに向けていないのであろうか。彼女の熱情は一異性への浮薄なのぼせ上がりに過ぎなかったのであろうか。キリスト教徒の若い男にとって、ユダヤ人の娘が概ねそうであったように、ジェシカは妙（たえ）に美

しかったのであろう。彼女はラケルばりの女性であったかも知れない。レアの面影は彼女のうちに見出し難い。

婚約期にリアがシャイロックに贈った記念の指輪をジェシカは持ち出した。[46] そして歯牙にも掛けぬかのように、猿一匹と引き換えに人に譲り渡した。一匹の猿はここで経済的には反価値を表象している。婚約指輪は然るに、超越的価値を具現している。それはそのようなものとして、通常の例えば商業的価値とはカテゴリーを異(こと)にしている。それに見合うのは価値にあらざる価値でしかないのだ。

無償の行為とでも言うべき交換がなされた。[47] 異様なものにすら思われるこの取引は然るに、グロテスクな想念をおぎ寄せる。シャイロックは叫ぶ、自分なら「荒野を埋めつくすほどの猿の大群とだって交換」(115-16) すまいと。[48] 想定上とはいえ交換の体系が狂ってしまっている。価値の言説は無化されている。

違った捉え方をしてみよう。猿はアントーニオの債権者によって大切に飼われていた。この者にとって、それは非常に可愛い愛玩動物だった。このかけがえのないものを敢えて手放して、この人物はシャイロックの指輪を手に入れた。猿と指輪は愛情の投資において、等しかった。猿に注がれた愛情と結婚指輪に結晶化された夫婦の愛は、同じ重力を帯びていた。

余人ならいざしらず、この論理はアントーニオの債権者には通用しそうにないのではあるまいか。破産したアントーニオは債鬼に苦しめられるが、この人物も同じ手合いと目される。欲得ずくの男。生き物をこよなく愛する人間には思われない。何かの動物に深い愛情を寄せる人は、よんどころなく飼えなくなるというような情況に陥らない限り、これを他人に譲ることはない。やむを得ずそうするにしても、相手を選ぶであろう。この人物は行きずりとは言わないまでも、面識がそれまでほとんどなかった相手に譲っている。何かの拍子に抱え込んだこの猿を厄介払いしようと、かねがね考えていた。必ずしも連れ歩いていたのではないであろう。例えば、この者の家の前をジェシカが通りかかり、猿を目にし、どういう風の吹き回しか気に入って、譲り受けるべく当人と交渉した。無償でというのは、ヴェニス市民の気質に反する。あるいは掟に背く。ヴェニスの流儀ではない。ジェシカは早く処分したいと望んでいた指輪を交換物として、差しのべた。両者の思惑は一致した。

やはり理解に苦しむのは、どうしてアントーニオの債権者はこの指輪を受け取ったのかということである。ユダヤ人の婚約者の名前、もしくはイニシャル、贈与日、はては銘のようなものが刻印されていたと思われる。持っていて何になるのであろう。売りさばくのは先ず難しい。素材はトルコ石。これに還元して売るのが関の山であろうか。猿を厄介払いしたい一心だった。引き取ってもらえるなら、お礼は何だって構わなかった。そういうことであったのだろうか。無意味さの感覚はしかし、振り払えない。もう一方の当事者にとっても、本交換は無償性に特徴づけられている。本取引で交換されたものこそは、正しくかかる特質だったのではないであろうか。

愛する人と一緒ではあれ、異郷の地を漂泊するジェシカには不安や寂しさはあったろう。それを慰めてくれるペットが彼女には必要だった。その意味では、指輪と交換に猿を彼女が手に入れたのは分からなくもない。ただ、不思議にもベルモントに落ちのびたジェシカは、猿を同伴していない。飼い方が分からず、死なれてしまったのだろうか。必ずしも動物好きではなく、手に余して手放したのだろうか。多分元の飼い主と同様に。これ以上の想像は控えるに如くはない。[49)]

ジェシカの猿。反面、猿は、家族のかけがえのない一員として愛される犬や猫のような身近な生き物とは違う。この動物を見て漠たる不快感にとらえられた経験がある人は、いなくはないであろう。あらゆる動物種のうちで人間に最も近い親戚。それは進化の過程でわれわれが克服したはずの地点を常に、指し示している。猿を前にする時、われわれは退行の可能性を突きつけられる。先祖返りの予感におののく。種としての特異性から人間の行動を最も巧みに真似することが出来る動物なる猿は、本質的にパロディを体現する存在である。猿とは優れて、人間の戯画、亜人間の究極相なのだ。[50)]

シャイロックの指輪が一匹の猿に化けてしまったのは、はずみでも何でもない。取るに足らぬ一逸話などでは決してない。それはユダヤ人夫婦の紐帯を蔑語風に焦点化しているのだ。ユダヤ人の両親が猿でしかないということを暗喩しているのだ。アントーニオの債権者とジェシカのこれは共犯だった。二人のこの不謹慎な行為を通して、ユダヤ民族は侮蔑されたのだ。偏頗な見方であろうか。

狂ったような散財は、彼女のかかる行為に比べればどうということはあるまい。ジェシカに共感を寄せるユダヤ人はまずいないであろう。大抵のユダヤ人は彼女を疎ましく感じるであろう。深い感情的、精神的な絆で結ばれていたと想像される両親。その結婚指輪を大して知り合いでもないよそ者のキリスト教徒に与え、見返りとして猿を受け取った彼女の所業は、特に彼らを疎外させるであろう。

西欧キリスト教社会において、これはマイノリティの宿命に他ならなかったが、ユダヤ人は動物として表象され蔑視された。典型的には豚。殊にドイツでは「ユダヤ人の豚」は俚諺風ですらあった。彼らの遠い先祖は豚の生まれ変わりと想像され、豚肉に対するユダヤ人の禁忌はとも食いを避ける機制と受け止められもした節がある。マラーノの語義は「豚」である。蔑語風に彼らは犬と呼ばれ、ある種の犬が受ける仕打ちに堪えなければならなかった。小説『審判』の終わりで、主人公が犬のような惨めな最期をとげる様を描いたのはユダヤ人作家カフカだった。シャイロックはアントーニオから始終犬呼ばわりされ、どれ程屈辱的な思いを嘗めさせられたことか。批評家によりアントーニオの高潔な人格が能天気にも称揚されているが、もっと健全な批判精神を批評家たるもの身につけるべきだ。本篇でシャイロックは人間を殺めた狼の転生した姿として言及される。ユダヤ人は羊と対蹠的に神の左手にいる呪われた動物、その想定された淫乱さにより堕地獄を運命づけられた動物、山羊と観念上結びつけられた。猿もこう

したユダヤ人にまつわる獣的心象を構成している。それは特に淫乱さを象徴する動物であるらしい。ジェシカの猿は、ユダヤ人にまつわる動物寓話の一環なのだ。[51)]

金(かね)を介さない交換で、猿と均衡を保つ問題の指輪は「トルコ石」“turquoise”（3.1.114）。これを身につけていると若い女は不妊症に陥るとの俗信が流布していたようである。直截的には、ジェシカは迷信めいた民間伝承に惑わされたと判断されなくもない。[52)] しかしそうした俗信が気掛かりなら、そもそも家から持ち出さなければよかった。彼女はこの結婚指輪そのものを、何としても廃棄したい衝動に駆られ、持ち去った。そう思われてならない。そうした行動に走った彼女の心のうちは、本質的には忖度すべくもない。ただ、漠然とではあるが、闇のようなものがそこにあったのではないかと察せられる。

父親の娘であること、ユダヤ人の血を引いていることでジェシカは、深く悩んでいる。出生の条件が彼女には厭わしい。指輪は生誕の災厄を凝縮するフェティッシュとして彼女を荒立て、苛んだのであろう。ユダヤ性の呪縛からわが身を解き放とうとするかのように彼女は、宗教的・社会的救済の零度を刻印するこの記念の品を譲渡し去る。それは自嘲的、自罰的行為の様相を呈していたであろうか。[53)]

指輪が徴憑するものは血の宿命以外のものではない。ロレンゾーとの結婚によりキリスト教共同体に加入したジェシカは、己が出自のせいで、ヴェニス社会が終極的に志向する喜劇的な調和のヴィジョンから疎外される現実に向き合うことになるであろう。

註

本論は、「『ヴェニスの商人』―― 経済と贖いの機序」というテーマのもとで書かれた筆者の四篇の先行論文を踏まえて構想されている。いずれも『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』（北海道大学）に掲載された。すべて副題を付した。副題、掲載誌号数・発行年、掲載頁は以下の通り。

⑴「『酔狂』」なる人肉契約の成立」、45（2003）、201-30。
⑵「取立てを要求される人肉抵当、もしくは購われざるアントーニオの命」、46（2004）、87-124。
⑶「人肉法廷 ―― 文化的相対性の地平、そして法至上主義の顚末」、47（2004）、73-108。
⑷「人肉法廷の非条理、もしくは究極的に購われるシャイロックの命」、48（2005）、25-69。

論点、引証の重複は極力避けた。

テキストの定本としては、上記先行論文同様、*The Merchant of Venice*, ed. Kenneth Myrick, rev. ed. (New York: New American Library, 1998)を用いた。邦訳は原則として、松岡和子訳（ちくま文庫）を借用した。それ以外の場合は、その旨ことわってある。

1）イタリアの小説家セル・ジョヴァンニ・フィオレンティーノの物語集 *Il Pecorone* [1558] に収録された「ヴェネツィアの商人」（『シェイクスピア関係のイタリア小説』所収、斉藤祐蔵　訳 [南雲堂、1964]、pp.17-46）に、当時英訳は存在していなかったにもせよ、シェイクスピアは何らかの形で接することが出来たと考えざるを得ない。本稿の後半部で扱うジェシカとロレンゾーの話を除き、物語の粗筋がほぼ符合するこの先行テキストを本篇の種本と断定してさしさわりないであろう。然るに、このテキストでも元金は踏み倒されている（pp.41-42）。ただ、ポーシャの対手は債権者のユダヤ人に元金の受け取りを肯んじなかったなどという、事実の検証に耐えない言辞を弄してはいない。

2）先行論文⑴の註５）を参照のこと。どのくらいの高の金か、他にも様々に推測されている。Horace Howard

Furness, "*The Merchant of Venice*," Shakespeare A New Variorum Edition (Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1888)は、二万から三万ポンドと踏んでいる（p.33）。1888年時点の英国貨幣で、この数値。今なら、いかほどであろうか。Daniel Banes, *The Provocative Merchant of Venice* (Silver Spring and Chicago: Malcolm House Publications, 1975) は１ダカットが現代の米国通貨で10ドルに相当すると試算している。とすれば、三万ドル。これだと、当時の日米為替相場１ドル360円を適用して一千八十万円。三十年近く前であることを考慮しても、額が小さ過ぎよう。

3）「ヴェネツィアの商人」、pp.30–31。

4）同上、p.31。

5）譲り渡されようとするシャイロックの財産の半分は、原告が命を狙われたことへの慰謝料としての、他の半分は、ヴェニス市民（しかも有力なる市民）への起こり得た致死的な襲撃を通してヴェニス共同体が被りかねなかった痛手に対する賠償としての意味合いを、各々、もっているように思われる。

6）ヴェニス市民をのみ外国人の致死的な襲撃から保護する異邦人法は、平等を生命とする法の精神に背くものである。Richard J. Arneson, "Shakespeare and the Jewish Question," *Political Theory*, 13 (1985), 85–111 が主張しているように、キリスト教の普遍主義にもとるものでもある(98)。が、それは他にも、現実的な局面で大きな不備を孕んでいる。シャイロックの殺傷行為は未遂に終わった。それでも罰はあのように峻刻を極めた。罰は重すぎて罪に見合っていないのは紛れもない、それ以上に問題なのは、被害者が財政的にはなはだしく潤ったことである。この法がこのままかり通るようなら、キリスト教徒のうちで、目星をつけた大金持ちのユダヤ人を執拗に挑発し、相手がたまりかねて刃物でも振り回すよう仕向け、この法に頼って、かくも旨味のある金銭的代償を引き出そうとする者が現われないとも限らない。(無論、傷害は一歩手前で回避されるようもって行くのが最善である。よしんば身体的に危害を被った場合でも、負傷が生命に及ぶようなものとならないよう被害者は気を使わねばならない。命を失っては元も子もない。)世界有数の商法を擁するヴェニスで、異人法のような不合理で野蛮な法が通用しているとは、驚きだ。もし異人法が、ある批評家が推論しているように、ポーシャの捏造の所産に他ならないなら、ヴェニスの法廷に末永く消えない汚点を残すことになろう。(Amiel Schotz, "The Law That Never Was: A Note on *The Merchant of Venice*," *Theatre Research International*, 16 [1991], 249–52.) 人肉法廷に対し最終的に責任を負っていたヴェニスの最高権力者なる公爵が、ポーシャのかかる逸脱をそれと知りつつ黙許したとするなら、事は一層重大である。ヴェニスの司法は自殺行為を犯したのだ。いずれにしても、こうしたことが真相として暴かれたなら、シャイロックに対してなされた財産処分の決定は悉く破棄されるのが至当だ。

　異邦人法は、種本はもとより、先行するいかなる人肉契約物語にも見られない。シェイクスピアの創意工夫である。この示差的な仕掛けのせいで、本テキストは猛悪な反ユダヤ主義の書となってしまった。だが、毒をもって毒を制すの機制がここに想定されないであろうか。悪逆な法を差し挟むことで、ひょっとしたらポーシャにこれをにわかに、あるいは前もって用意周到に案出させ、法廷をしてこれを黙認せしめることで、シェイクスピアは文化的な暴虐の光景を現出させた。政治的に開明された一部の特権的な観客・読者は、その意味を捉え損ねはしない。文化史的に曠古の、あるいは古典的な反ユダヤ主義の戯曲は、反ユダヤ主義の非条理と虚妄を実演する。『ヴェニスの商人』は、反ユダヤ主義の愚昧の heuristic な表象である。シェイクスピア劇のある種の受容者は、喧(かまびす)しいミメーシスを通して突きつけられた現実の汚辱を見据え、それにどう対処すべきか適正に判断する。しかし、この文脈でグロテスクなものの悪魔払いを予感するのは許されるであろうか。

7）Barry Schwartz, "The Social Psychology of the Gift," *The American Journal of Sociology*, 73 (July, 1967), 1–11 (3).

8）バッサーニオが現われたのを目にして、登場人物の一人はアントーニオに向かって、「あなたのご親戚」が来たと言っている（1.1.57）。原文では、"your most noble kinsman."（「この上もなくやんごとない」"most noble" バッサーニオはやはり、貴族［のなれの果て］なのであろう。）直接の種本ではアントーニオに相当する人物は親族ではなく、名付親。ただ、本篇でこの親族関係はその後忘れられているように思われる。

9）マルセル・モース、『贈与論 ―― 太古の社会における交換の諸形態と契機』［1923–24］、『社会学と人類学Ⅰ』所収（第二部）、有地亨　他訳（弘文堂、1973）。本稿の主題を考察する上でモースの seminal な本研究が裨益するところ最も大きかった。爾後の贈与論はモースの所論を必然的に意識しつつ展開されることになる。

以下は、その数例。

James Carrier, “Gifts, Commodities, and Social Relations: A Maussian View of Exchange,” *Sociological Forum*, 6 (1991), 119–36. モースの理論の最も優れた応用例の一つに数えられるであろう。*The Logic of the Gift: Toward an Ethic of Generosity*, ed. Alan D. Schrift (London: Routledge, 1997). 半ばモース記念論集の観を呈しているが、フランスのさる高名なフェミニストの論考のように贈与論とはまるでかけ離れた論文も掲載されている。編者の真意を疑う。Maurice Godelier, *The Enigma of the Gift* [1996], trans. Nora Scott (Chicago: The Univ. of Chicago Pr., 1999). 本書の半分弱は「モースの遺産」“The Legacy of Mauss” の考察にあてられている（pp.10–107；notes pp.222–33）。

モースと同じくらい有益だったのは西太平洋の原住民の間で行われているクラ（kula）と称される交換の形態を考察したマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』[*Argonauts of the Western Pacific*, 1922]、寺田和夫　他訳、世界の名著（中央公論社、1967）。マリノフスキーは、「所有と権力を誇示したいという虚栄心」を「贈与の基本的な動機」として挙げ、「富の贈与は、贈与する側の、受けとる側への優越性の表現である」と述べている（p.212）。なお、本書には『金枝篇』の著者フレーザーの非常に好意的な序文が付いている。モースの贈与論に影響を与えた事実も付記しておく。

エミール＝バンヴェニストの比較言語学的考究にも興味を惹かれた。「印欧語族の語彙における贈与と交換」についての研究で、彼は衒示的な気前よさによって王侯貴族の威信が保たれる事情に論及している：Emile Benveniste, “Gift and Exchange in the Indo-European Vocabulary” [*Problems in General Linguistics*, 1948–49; trans. Mary Elisabeth Meek, 1971], repr. in Alan D. Schrift (ed.), *op. cit*. pp. 33–42 (p. 41). もう一点：エミール＝バンヴェニスト、「与えることと取ること」、『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅰ　経済・親族・社会』[1969] 所収、前田耕作　監修（言叢社、1986）、pp.57–115。

10) 社会的関係において絶対的な不均衡がここでは生じている。アントーニオの優越性とは極めて対照的に、返酬が倫理的要請として組み込まれている贈与において、その義務をまるで果たすことが出来ない、あるいは果たす意志がないロレンゾーは際立った劣等性をさらし、世間での評判の悪さを甘受することになるであろう。John F. Sherry, Jr., “Gift Giving in Anthropological Perspective,” *Journal of Consumer Research*, 10 (September, 1983)の論点は引用に値する：“To avoid feeling inferior and to safeguard reputation, the recipient must reciprocate. Failure to reciprocate appropriately can result in an asymmetrical relationship (159).” 富が尽きるまでロレンゾーはアントーニオに恩義を感じる次第となる。これは負い目と言ってもいい。借金、ついに返済し得ぬ借金の隠喩と捉えることも許されよう。ロレンゾーは恩人に恭順の念を示さなければならない。従順に服従しなければならない。Barry Schwartz, *op. cit*. によれば、贈与は時に支配として機能する（p. 4）。

ロレンゾーはアントーニオからの贈り物を受け取る時、我知らず卑屈さをさらすはめになろう。贈与は必ずしも祝福ではない。エマーソンの思想の機微が痛感される：「恩義の法というものは、難しい一つの水路で、注意深い航行、若くは頑丈な小船を要するものである。凡そ進物を受けるという事は、人の務めたるべき事でない。然るを人はどうしてこれを贈ろうとするのであるか。吾々は自給して行く事を欲するものである。されば吾々は贈与するものを全く容赦しないのである。吾々を養う手は、或いは咬まれる危険がある。吾々は、愛情から出たものであれば、どんなものでも、これを受ける事が出来る、何となればそれは自分自身からそれを受けると同じ事になるからである、併し何人でも、傲然として自ら与えたと為すような人からはそれを受ける事は出来ない。吾々は時々自分の喰う処の肉を悪むことがある、それはその肉に依って生きて行くという事に、何となく賤しい服従心があるように思われるからである」。（「進物論」、『エマスン論文集Ⅲ』所収、戸川秋骨　訳［岩波文庫、1939］、pp.133–41［pp.136–37］；現代表記に改変。）達意の訳だ。原文も挙げておこう：“The law of benefits is a difficult channel, which requires careful sailing, or rude boats. It is not the office of a man to receive gifts. How dare you give them? We wish to be self-sustained. We do not forgive a giver. The hand that feeds us is in some danger of being bitten. We can receive anything from love, for that is a way of receiving it from ourselves; but not from any one who assumes to bestow. We sometimes hate the meat which we eat, because there seems something of degrading dependence in living by it” (Ralph Waldo Emerson, “Gifts” [1844], *Essays*, Second Series [Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1856], pp. 153–59 [pp. 155–56]). なお、エマー

ソンの本随筆は Alan D. Schrift (ed.), *op. cit*., pp. 25–27 に全文採録されている。

ほとんど慈善の行為としてアントーニオはこの施しを行っている。近年における最も優れた贈与論の著者 Lewis Hyde によれば、慈善は最悪の場合「贈与の暴虐」なのであり、そのようなものとして人々を操る：“At its worst, it [i. e., “charity”] is the ‘tyranny of gift,’ which uses the bonding power of generosity to manipulate people” (*The Gift: Imagination and the Erotic Life of Property* [New York: Vintage Books, 1979], p. 138). 本書には邦訳がある：ルイス・ハイド、『ギフト：エロスの交易』、井上美沙子　他訳（法政大学出版局、2002）。

アントーニオの贈与をポトラッチと関連づけるのはそう牽強付会ではないであろう。実際ポトラッチは原給付（protoprestation）とでも称すべき社会現象ではないであろうか。因みに、ルイス・ハイド、*ibid*. はこの語の語義を「贈り物」、「与えること」、あるいは「与える」（動詞）と解している（英文原著、p.28）。ハイドによれば、ポトラッチをポトラッチたらしめる競合的性格は白人によりもたらされた（同、pp.30–31）。斬新な論点だ。ただ、実証的な検証が必要とされよう。

11）Susan Oldrieve, “Marginalized Voices in ‘The Merchant of Venice,’” *Cardozo Studies in Literature and Law*, 5 (1993), 87–105 は、ロレンゾーにかかる贈与を行うことで、アントーニオは「実際ジェシカをシャイロックの娘というよりは、自分自身の娘としている」とした上で、（小箱選びの件で）「娘を処分する家父長の権利を苦い思いで受け入れたポーシャは、都合良くそれが周縁化された集団の成員に属する場合、権力者がそれをほとんど意に介さない様を突如見て取っている」と記している（p.95）。

12）法廷は財産処分の原則を決定しただけで、仔細には立ち入っていない。具体的に、シャイロックの財産はどう整理されるのであろうか。ヴェニス市民の誰か（アントーニオは、受益者である以上、不適格と思われるが）が管財人として立てられると仮定しよう。現時点でシャイロックが所有している現金や貴金属類の査定は、面倒でないはずである。少々厄介なのは、現在保有中の多分数ある債券の扱いである。高利貸しを否認するキリスト教徒のヴェニス市民は、これらから利子を生じさせることは出来ない。とすれば、満期を迎えた証書につき、現金だけを随時取立てて行くことになるであろうか。不良債権も何件か発生するであろう。いずれにしても、回収が完了した時点で始めて、返還額の合計が判明することになる。例の三千ダカットは、負の資産ということになる。かくして動産の総計が算定される。不動産はどうであろうか。土地は問題外であろう。ただ、後述するジェシカの出奔の模様から判断するに、家屋は所有しているように思われる。シャイロック一家はユダヤ人には例外的にも、ゲットー住まいではなかったようである。シャイロックはある種の特権を享受していたということになる。資力によるものであろうか。ともあれ、家屋の資産価値は然るべくはじきだされる。動産、不動産合わせた総資産がこれで確定する。その半分をシャイロックは受け取るが、そこに不動産の家屋敷が含まれていると考えるのが穏当であろう。種々の事情から、財産の分配額が確定するのは、かなり先になるであろう。

シャイロックの財務整理はことごとくアントーニオの意志に口述されている。ポーシャの裁定では無一物となっていたところ、アントーニオのおかげで己が財産の半分を取り戻すことが出来たシャイロックは、この部分を贈り物としてアントーニオから受け取ると考えることも許されよう。しかしながら、一連の展開を通観するに、すべてはアントーニオがユダヤ人高利貸しに賜った毒ではなかったかという疑念を払拭し得ない。贈り物が毒と化す。それは贈与が宿命的に孕んでいる消息でもある。マルセル・モースは、ゲルマン系の言語では、「与える」を表す最も一般的な動詞の名詞形が「贈り物」と「毒薬」の意味を有している事実を指摘し、贈与の呪術的両義性について述べている：Marcel Mauss, “Gift, Gift” [1924], repr. in Alan D. Schrift (ed.), *op. cit*., pp. 28–32. かかる言語的特性は贈与の真相の重要な一面を反映している。

強制改宗も贈与としての局面をもっている。シャイロックは死後の霊魂の救いという贈り物を授かったのである。しかしながら、諸家により復讐の契機が読み取られているこのエピソードは、贈与の闇黒面を如実に露呈していよう。Ronald A. Sharp, “Gift Exchange and the Economies of Spirit in *The Merchant of Venice*,” *Modern Philology*, 83 (February, 1986), 250–65 の問いかけは深甚だ：“Does Shakespeare intend the forced conversion to be seen as a true gift or as a poisonous one?　Are the cruelties visited on Shylock the inevitable outcome of gift exchange, its dark underside?　Or are they merely the result of a flawed application of an otherwise sound ideal?　Is there always a hidden cost in gift exchange or only when the ideal has been perverted?” (259).

それにしても、執拗にそして矢継ぎ早に味わわされる不条理の経験。Daniel Banes、*Shakespeare, Shylock and Kabbalah* (Silver Spring, Maryland: Malcolm House Publications, 1978) はシャイロックに対する迫害にカフカの作品世界を凌駕する情況を認めている（p.101）。

13）変則は前半部、つまり本来の人肉法廷でも犯されていた。人肉抵当取り立ての主張を認められた原告シャイロックは、即、被告アントーニオから心臓近くの肉一ポンドを切り取ろうとする。裁判官ポーシャのお墨付きによってである。法廷が時を移さず死刑執行場と化そうとしていた。無論、このようなことは現実の世界では起こり得ない。暴君に国民が隷従させられているどんな国家でも、表向きは法的正義が実現する聖なる場所である法廷は、罪人がいかに重大な犯罪を犯したかが明白に立証され極刑が宣告されようと、その者の血により汚されることはない。私刑よろしく、そこで被害者が加害者を殺めるということもない。死刑はあくまで、死刑執行人により然るべき刑場で執行されるはずである。

14）James O'Rourke, "Racism and Homophobia in *The Merchant of Venice*," *ELH*, 70 (Summer, 2003), 375-97 も私と同じ見解だ（387）。

15）『出エジプト記』、16章：マナ、『聖書』、新共同訳［日本聖書協会、1988］、［旧］、pp.119-22。

Jeanne Heifetz, *"Love Calls Us to the Things of This World": The Return to Belmont in "The Merchant of Venice,"* The LeBaron Russell Briggs Prize Honors Essays in English 1981 (Cambridge, Massachusetts: Department of English and American Literature and Language/Harvard Univ. Pr., 1981)の犀利な分析では、シャイロックから取り上げられる財がマナと称される。キリスト教徒のうちにあって非情さは神慮の業の装いを取るのだ（p.48）。

シャイロックの資産が、神が降らせる食べ物マナとしてキリスト教徒の飢えを癒す。ポーシャが法廷で熱く説いた「『慈悲の特質』［"the quality of mercy," 4.1.183］は、実際は狼のように残忍だ。法廷でのポーシャの仲裁はアントーニオの身体を救いはしたが、その過程でシャイロックをマナに変えてしまった」（Richard Weisberg, 10 "'Then you shall be his surety': Oaths and Mediating Breaches in *The Merchant of Venice"* from the author's *Poethics and Other Strategies of Law and Literature* [New York: Columbia Univ. Pr., 1992], pp. 94-104[p.95]）。

マナとしてシャイロックはむさぼり喰われる。カニバリズムの余韻がそこにはあるかも知れない。（『アテネのタイモン』の心象風景は正に、そのようなものだ。この点については、拙論「『恩恵の魔力』――『アテネのタイモン』と贈与のパトス」、『文学』［岩波書店］、Vol.54《シェイクスピア ―― 劇場と戯曲》［1986年4月］、203-14を参照のこと。）あり得る展開が眼前に浮かぶ。シャイロックの資産の究極的には絶対の受領者なるロレンゾーは、放蕩家の本性を発揮し、金にあかして日々美味なる肉を口にする生活にうつつを抜かす。肉は比喩的に肉欲を満たす性的対象であっても構わない。シャイロックの身体は、ロレンゾーが消費する肉二態に変容する。

（むさぼり喰われるシャイロックは、聖書のマナとは別の、文化人類学や比較宗教学の概念であるマナ［mana］を具有しているようにも思われる。彼は供犠の風光において、聖なる犠牲者として遇されているのだ。彼はタイモンと同族だ。闇黒のコミューニオンが催されたのだ。）

商業都市ヴェニスを舞台とした本篇が呈示する人間論では、人（"person"）は財布（"purse"）を満たす金と等式で結ばれる。アントーニオは三千ダカットという金によって表示される人間である。少なくとも彼は、テキストで意識的に表現されているように、三千ダカットに「縛られた」"bound" 存在である。（典型的には、*Shylock*. "Three thousand ducats for three months, and Antonio bound" [1.3.10]. アントーニオはバッサーニオのこれだけの期間のこれだけの借金につき、保証人になるの意。）娘（"daughter"）はダカット貨（"ducats"）と見分けがつかない。ダカット貨の亡失は、ダカット貨を身に帯びての娘の死を父親に希求させる。だが唯物論にはまっているのでは必ずしもない。ここに想定されるある種呪術的な情況を喚起したいのだ。人は己が一部なる、あるいは全体を占める資産（もしくは、というより往々にしてその代替物）を他者に譲る。そのとき、人はその分だけ自分自身を譲り渡しているのだ。受贈者はこれを消費するとき、贈与者のその部分を自分の身のうちに取り込んでいるのだ。贈与は贈与者の人格（身体）と呪術的に連結している。（モースはその『贈与論』でこの連関を論及しそびれた。そのことを彼は後に、人格の概念と取り組んだ自身の最後の論文 "A category of the human mind: the notion of person; the notion of self" [trans. W. D. Halls, 1938] in *The category of the person: Anthropology, philosophy, history*, eds. Michael Carrithers

et al. [Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1985], pp. 1–25 [p. 23, note 5]で告白している。邦訳：『人というカテゴリー』、厚東洋輔　他訳、文化人類学叢書［紀伊國屋書店、1995］。）

法廷で全財産を根こそぎ持って行かれそうになったとき、つまりは全的な贈与を強要されたとき、破れかぶれに、「いや、命［も］丸ごと取ってくれ、…／生きる手立てを取るのは／命を取るってことだ」"Nay, take my life and all!..../You take my life/When you do take the means whereby I live"（4.1.373–76）とシャイロックは叫び立てているが、それは如上の理念からも説明が可能である。「生きる手立て」である財産をことごとく召し上げられるということは、人として、言うなればもぬけの殻になるということである。生命なき存在と化すということである。

ともあれ、シャイロックの財を犠牲にして、キリスト教徒たちは法廷で大盤振る舞いをした。この長い注を James O'Rourke の透察で締め括ろう：「これらのキリスト教徒たちは心ゆくまで富に浮かれ騒ぐことが出来る、というのも」「行き過ぎた金銭づくがユダヤ性に帰せられ」、「貪欲のスティグマは指定された犠牲の山羊により運び去られるからだ」（*op. cit*., 389）。

16）James O'Rourke, *op. cit*.は、死ぬ時点でも富裕な身の、原型的に金持ちであるユダヤ人としてシャイロックはイメージされていると考えている（389）。

仮にシャイロックが立ち直り、むしろ起死回生をはかるべく経済人として大きな事業を興すとする。這般（しゃはん）の事情で例えば、潤沢な資産でもカバーし切れない程、借金の山が出来る。つまりは借財を背負ってしまう。（ユダヤ人が債務者に堕すことはないとは言い切れないのだ。）局面を打開出来ないまま、シャイロックは死ぬ。かくてマイナスの財が残される。既に譲渡証書を受け取り、遺産の受贈に合意してしまっているロレンゾー夫妻は、純法理的に、借金という負の遺産を相続する他ないであろう。借財を引き受けざるを得ないと判断される。このようなシナリオはシャイロックの遺産相続にはそぐわない。金持ちのユダヤ人は、あくまで金持ちのユダヤ人としての一生を全うするのである。

だが、この先すぐ述べるように、別な事情で彼が富をすべて失ってしまう可能性は皆無ではない。

17）同時代のヴェニスにおけるユダヤ人と異端審問については、Brian Pullan, *The Jews of Europe and the Inquisition of Venice 1550–1670* (London and New York: I. B. Tauris Publishers, 1983).

18）高利貸しによる殖財との仮想的な競合が、あるいは意図されているかも知れない。語源上も "usury"「高利貸し」と同族の "use" は、この経済的営為の意味で用いられることがあった。*O. E. D.* (2nd Ed.)によれば："5. a.　The fact of using money borrowed or lent at a premium. b.　Premium on money lent to another; interest, usury.　Now *dial*. or *arch*.　Freq. *to take* or *pay use*". アントーニオが自身熾烈に憎悪する高利貸しを始める様は先ず想像されないが、なにがしかの暗合は感じ取られる。

19）この特有的にフロイト的な観念についての最も犀利な分析は Norman O. Brown, Chap. 15 "Filthy Lucre" from the author's *Life Against Death: Psychoanalytical Meaning of History* (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Pr., 1959), pp. 234–304 with notes pp. 342–49 に見出される。この不朽の名著には邦訳がある：『エロスとタナトス』、秋山さと子　訳（竹内書店新社、1970）。当該の一章の邦題は「汚れた金銭」。

20）キリスト教神学上、忌まわしいことこの上ない経済的慣行の果実に他ならなかったシャイロックの財産。その半分を取得したアントーニオは、それが汚れた富なるが故に、自身で使うのを控えたのではないであろうか。とするなら、これをもとに利殖を計るとすれば、理にもとることになろう。この金は畢竟、あぶく銭なのだ。そしてそのようなものとして、堅実な用途には適していない。ロレンゾーにこれを贈ることにしたのは、まんざらいわれなくはなかった。

21）Graham Holderness, *William Shakespeare: "The Merchant of Venice,"* Penguin Critical Studies (Penguin Books, 1993) はこうした経緯のうちに「包括的かつ組織的な文化的暴力行為」"comprehensive and systematic act of cultural violence" を見て取った上で、こう結論している："By appropriating Shylock's wealth and diverting it ultimately into the Christian economy, and by forcing Shylock into conversion, Antonio has been able to strike a harder blow than any he had ever aimed at the Jewish religion and Jewish business he so bitterly despises.　Shylock, meanwhile, is finally proven right: he was never, in the last instance, considered by Venice as anything other than an outsider" (p. 53). シャイロックの「殺人未遂という暴力」がかかる行為を惹起せしめるが、それと「キリスト教徒のより狡猾で、首尾良く行った法的暴力」との「差異」は顕著である：Vicki K. Janik, *"The Merchant of Venice": A Guide to the Play*

(Westport, Connecticut: Greenwood Pr., 2003), p. 76（趣意）。

22）ユダヤ人は主として復活祭の頃、無垢のキリスト教徒の少年を拉致し、キリストのまねびにおいて殺害する（典型的には磔刑に処する）との風評、いわゆる「血の中傷」は中世以来西欧キリスト教社会にはびこり、筆舌に尽くせない惨禍を生んだが、文学的には、「ユダヤ人の娘」なるバラードが異型として派生した。加害者はユダヤ人の娘。被害者はこの娘に誘き出され、あえなき最期を遂げるキリスト教徒の少年。Harry Levin, "A Garden in Belmont: *The Merchant of Venice*, 5.1" in *Shakespeare and Dramatic Tradition: Essays in Honor of S. F. Johnson*, eds. W. R. Elton *et al*. (Newark: Univ. of Delaware Pr./London and Toronto: Associated Univ. Presses, 1989), pp. 13–31 は、主題上ジェシカがこの暗い伝説を裏返していると取っている (p.20)。洞察であると思う。なお、私は最近「『呪わしいユダ人』：血の中傷と西欧におけるユダヤ人の表象」について論じた：『国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書』（北海道大学）、68（2007）、83–122。

儀礼殺人とも称される「血の中傷」には、ユダヤ人迫害の反転の局面がある。つまり、キリスト教徒によるユダヤ人の殺害という陰惨な事実が、夢の中でのように、前者の側の集団幻想によって倒立させられ、かかる誣告が産み出されたということである。「血の中傷」の民間伝承風の変形である「ユダヤ人の娘」の基底にも、同じ心的メカニズムが認められるのではないであろうか。キリスト教徒の青年によるユダヤ人の娘の誘惑が、深層心理においてかく偽装された。儀礼の風光においてなされる血なまぐさい殺人の部分はこの際、この絵図から捨象して構わない。

われわれが注視している『ヴェニスの商人』の副筋は幻想ではなく、ある種一般的な現実から汲み取られている。次稿で触れるが、究極的にそれは祖型的な物語に遡及すると考えられる。ここでは、直接の関連が想定される最初期の部類の作品にかりそめながら目を向けておきたい。当該のテキストはラテン語で書かれた中世宗教説話集の一篇。Beatrice D. Brown, "Medieval Prototypes of Lorenzo and Jessica," *Modern Language Notes*, 44 (1929), 227–32（229–30）によれば、恋するキリスト教徒の青年、美しいユダヤ人の娘、娘の年取った金持ちの父親という三つの本質的な特徴が見られるとのことである。父親はシャイロックばりの男で宝を後生大事にしまっているユダヤ人。財貨は例によって盗み出されるが、娘にそそのかされて青年が一人この窃盗を実行に移す。ユダヤ人の一家は父親始めこぞってキリスト教に改宗する。強制的にというのでは、ないらしい。青年はロレンゾーと違わず、放蕩家。いかなる形態でシェイクスピアがこの作品を知るに至ったのかは不明である、と Brown は述べている。シェイクスピア劇材源の集大成と言うべき *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. 1 [1957], ed. Geoffrey Bullough (London and Henley: Routledge and Kegan Paul/New York: Columbia Univ. Pr., 1977) にも、本テキストは収録されていない。Joseph Satin, *Shakespeare and His Sources* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1966)も同様。これを含む本説話集、邦訳が刊行されないものであろうか。

Beatrice D. Brown の注釈を踏まえ、James L. Wilson, "Another Medieval Parallel to the Jessica and Lorenzo Story," *The Shakespeare Association Bulletin*, 23 (1948), 20–23 は、ユダヤ人の娘ではなくサラセン人の娘が登場する類似の話を材源の候補として挙げているが、説得力はほとんどない。

人種、宗教の別がここでは大事な要因であるが、それを棚上げすれば、十四世紀イタリアの小説家 Masuccio により書かれた小説集の第一巻十四話は、本篇との関連が最も顕著な先行作品である。メッシナの青年がナポリのとある家の窓辺で、とても美しい乙女を見かけ一目惚れする。娘も青年を熱愛するようになる。父親は年取った強欲な商人。娘を家に閉じこめ、結婚させようとしない。召使い以下の扱いをしてもいる。青年は牢獄のような家から娘を解放しようと決心する。それで、娘の父親と親しくなる。(三十ダカット、父親に借金するが、それもたくらみの一環である。)彼は、大枚をはたいて買い取った女奴隷を乙女の家に送り込む。父親始め家の者が寝しずまった深更、乙女はこの女奴隷とともに、小箱を開け、中から取り出した宝石と千五百ダカットを超える額の現金を携えて家を抜け出し、隣家の廃屋に隠れ潜んでいた青年とその仲間と落ち合い、闇に紛れて逃走する。事の次第を知った父親は、娘の出奔と財産の窃盗に、死にたいと思う程絶望する。程なく、青年と乙女との間に子供が出来、娘の父親も臨席する中、結婚式が挙げられる。("Novel the Fourteenth," Part the First of *The Novellino of Masuccio*, trans. W. G. Waters [London, 1895], pp. 194–205. 本小篇は Geoffrey Bullough [ed.], *op. cit*., pp. 497–505 に "Probable Source" として収録されている。)結末の部分は別として、ストーリーが本篇副筋と酷似しているのは一目瞭然である。英訳はシェイク

スピア時代、現存しなかった。興趣尽きない本作品が英語で読めるようになったのは、十九世紀末になってからである。ただ、シェイクスピアがこの物語を知らなかったとは考え難い。原語で読んだか、親しかった知人のうちイタリア文化通からこの話を知らされた可能性が確実にある。本筋についても真相は全く同様であろう。(『ヴェニスの商人』本筋の材源について、私は先行論文(1)で注記した［注１)］。)

本篇副筋が Masuccio のテキストを下敷きにしているのは、間違いないであろう。然るに、青年をキリスト教徒、娘とその父親をユダヤ人にした、主要登場人物に言うなれば人種・宗教付けを施したとき、シェイクスピアは文化の潮流に逆らわなかったということであろうか。

23) "O my Christian ducats!" はダカット貨の裏面にキリストの像が刻まれていたから、こうシャイロックは叫んでいると Stanley Wells, "Money in Shakespeare's Comedies" in *Shakespeare et L'Argent*, ed. M. T. Jones-Davies (Paris: Les Belles Lettres, 1993), pp. 161-75 は解している（p.165)。

24) Daniel Banes, *The Provocative Merchant of Venice* の注記は興味深い："If the Elizabethans still pronounced 'daughter' with an appreciably hard *gh*, the reiterated juxtaposition of 'daughter' and 'ducat' would have sounded even more titillating than it does now" (p.38). ただ残念ながら、Banes の仮定は、シェイクスピア作品発音辞典の決定版、Helge Kökeritz, *Shakespeare's Pronunciation* (New Haven and London: Yale Univ. Pr., 1953)でも確証されない。

25) Joan Ozark Holmer, "Jewish Daughters: The Question of Philo-Semitism in Elizabethan Drama" in *"The Merchant of Venice": New Critical Essays*, eds. John W. Mahon *et al*. (New York: Routledge, 2002), pp. 107-43 (p. 126) によれば、駆け落ちはロマンティックな喜劇の常套的道具立てであるが、娘を盗み出すことで父親の財産の窃盗を内包している（p.126)。

一般的に、駆け落ちはその限り経済上の犯罪行為なのであるが、政治的にも断罪されべきである。というのも、家が国家の模倣形態である政治体制において、それは反逆を含意するからである：John Drakakis, "Jessica" in John W. Mahon *et al*. (eds.), pp. 145-64（p.159)。

26) クロード・レヴィ＝ストロース、『親族の基本構造』［1967]、上・下、馬淵東一　他監訳（番町書房、上1977、下1978)。最近、同名の表題で新訳が出た：福井和美　訳(青弓社、2000)。交換財としての婦女というレヴィ＝ストロースの思想に対し、英米の研究者は距離を置いているという：Marshall Sahlins, "The Spirit of the Gift" ［*Stone Age Economics*, 1972], repr. in Alan D. Schrift (ed.), *op. cit*., pp. 70-99 (p.94). いずれの立場が学問的に勝っているのかは定かでないが、後者の方が好感されよう。フェミニストの考えや如何。Gayle Rubin, "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex" in *Toward an Anthropology of Women*, ed. Rayna R. Reiter (New York: Monthly Review Pr., 1975), pp. 157-210 が、フェミニズムの視点からの論考としては白眉と思われる。本論文を構想する上で、重要な手掛かりとなった。代表的なシェイクスピア学者 Karen Newman による同じ視角からの論考 "Directing Traffic: Subjects, Objects, and the Politics of Exchange," *différences*, 2 (1999), 41-54 は晦渋。（雑誌名表記［語頭小文字］はこのまま。)

ジェシカを主人公に据えた Mirjam Pressler による本篇の改作 *Shylock's Daughter* ［1999], trans. Brian Murdoch (New York: Phyllis Fogelman Books, 2001)では、シャイロックはかねがね娘を「イスラエルの世代の鎖の輪」"link in the chain of the generations of Israel"（p.135）とみなしていた。「イスラエルの敵」"the enemies of Israel" であるキリスト教徒は娘を盗み出したことで、彼に対して考えられ得る最悪の害悪を及ぼした："They［i. e., "the enemies"］had chosen an innocent girl, not much more than a child, to do him the worst harm that anyone could do to him, to cut him out of the chain of the generations of Israel" (p. 156).

C. P. Laurent, "Dog, Fiend and Christian, or Shylock's Conversion," *Cahiers Elisabéthains*, 26 (1983), 15-27 によれば、財の循環を拒む度し難いけちん坊、娘を手元から放そうとしないことで女の循環を阻む男シャイロックは、喜劇の定式に従って敗北せねばならない (19)。一見、説得力ある論点だが、あたらない。というのも、シャイロックがユダヤ人共同体でこうした社会的交流を行う用意は十二分にあったと推察されるからである。思うところあって、外婚 (exogamy) の流儀でキリスト教社会と交際する、あるいは富を交換するというような気になれなかっただけのことなのだ。

27) Paul A. Cantor, "Religion and the Limits of Community in *The Merchant of Venice*," *Soundings*, 70 (1987), 239-58 (248-49).

28) Matthew Biberman, Chap. 1 "'His stones, his daughter, and his ducats': The Jew-Devil, the Jew-Sissy and the Theo-Sexual Matrix" from the author's *Masculinity, Anti-Semitism and Early Modern English Literature: From the Satanic to the Effeminate Jew* (Hampshire: Ashgate, 2004), pp. 7–46 with notes, pp. 198–205 は、「悪魔＝ユダヤ人」"Jew-Devil" と「女々しいユダヤ人」"Jew-Sissy" という著者が立てている二項対立の図式において、後者の形像をここに見ている(pp.32–33)。あくまで象徴的な次元で去勢されたとみなすべきシャイロックをこのように見立てるのは、果たして妥当であろうか。だいたい、"Theo-Sexual Matrix" なる概念自体、いかがわしい。

29) Lawrence Danson, *The Harmonies of "The Merchant of Venice"* (New Haven and London: Yale Univ. Pr., 1978), p. 22.

30) バラバスは金袋を受け止め、忘我の境地で叫ぶ："O my girl!/My gold, my fortune, my felicity [!]" (Christopher Marlowe, *The Jew of Malta* [c. 1589], 2. 1. 50–51). 先の "daughter" と "ducat" の併記は、"girl" と "gold" のそれと言語上、同工異曲である。やはり径庭は目立っている。バラバスは「黄金」と一体化した娘に、あたかも物神崇拝をささげているかのようだ。娘は「財産」"fortune" を取り返してくれる。「至福」"felicity" を彼は味わう。翻って、シャイロックにとって、娘は不幸の種でしかない。マーロウの本作品には邦訳がある：『マルタ島のユダヤ人』、『エリザベス朝演劇集』所収(筑摩書房、1974)。件の "gold" と "felicity" は、各々、「金」(かね) 及び「仕合わせ」と訳されているが、これではインパクトがないような気がする。同時代の劇作家ベン・ジョンソンの作品世界に通ずるものが、このシーンにはうかがわれるはずである。強力なけれんみが漂っている方が望ましい。

事件が起こった前の晩、正夢であったのだろう、シャイロックは金袋の夢を見た。そしてそのことをジェシカに語っていた。ジェシカはアビゲイルに倣って、小箱ではなく金袋を投げ降ろすことも出来たであろう。軌道は巧みに、修正された。小箱は、ジェシカとロレンゾーの話がその鏡像となっているポーシャとバッサーニオの話で枢要な意義を有しているあの三つの小箱と共振しているであろう。ポーシャの小箱も地に投げ落とされたという含みはないのだろうか。

31) John Doebler, Chap. 2 "*The Merchant of Venice*: Divine Comedy" from the author's *Shakespeare's Speaking Pictures: Studies in Iconc Imagery* (Albuquerque: Univ. of New Mexico Pr., 1974), pp. 39–65 with notes pp. 196–98 (p. 63). シェイクスピア批評にもセンスや decency が求められる。

32) Hermann Sinsheimer, *Shylock: The History of a Character or The Myth of the Jew* (London: Victor Gollancz, 1947) は、ジェシカがユダヤ人の娘、ユダヤ教の信者、ユダヤ民族の帰属意識のいずれについてもその片鱗だに示していないと断じている (p.105)。

33) George Henry Lewes, "Shylock's Humanity" [1850] repr. in *Shakespeare: The Critical Tradition, "The Merchant of Venice,"* eds. William Baker *et al*. (London: Thoemmes Continuum, 2005) の意見に、私もある程度は同感だ："...she [i. e., Jessica] is odious; and——I dare to say it——Shakespeare has committed a serious blunder in art by the mode in which he has represented Jessica, when he might easily have secured all he wanted by throwing more *truth* into the conception. That a Jewess should love a Christian, for him forsake her home, and abjure her religion is conceivable; but it was for the poet to show how the overmastering passion of *love* conquered all the obstacles, how love conquered religion and filial affection, and made her sacrifice *everything* to her passion. Instead of this, Shakespeare has made her a heartless, frivolous girl, who robs her father, throws away her mother's turquoise for a monkey, speaks of her father in a tone as shocking as it is gratuitous" (pp.66–67；イタリックスは原著者)。

ジェシカはありうべからざるキャラクターであった。彼女を擁護する批評家にはついて行けない。例えば、Austin C. Dobbins and Roy W. Battenhouse, "Jessica's Morals: A Theological View," *Shakespeare Studies*, 9 (1976), 107–20。表題から知られる通り、神学的な視点から、ジェシカの道徳を弁明した論考。論旨の紹介は省くが、私には非常に不毛に感じられた。Camille Slights, "In Defense of Jessica: The Runaway Daughter in *The Merchant of Venice*," *Shakespeare Quarterly*, 31 (Autumn, 1980), 357–68 も評価すべき点はほとんどない。この問題はこれくらいにとどめたいが、一つだけ、触れておきたい論点がある。Morriss Henry Partee, "Love and Responsibility in *The Merchant of Venice*," *Greyfriar: Siena Studies*

in Literature, 29 (1988), 15–23 は、駆け落ちするジェシカの勇気と、困窮せるロレンゾーを愛することで彼女が示している利他主義に言及している (18)。このような考えを共有する観客・読者はどのくらいいるのであろうか。

序でながら、ジェシカの命名法を瞥見しておこう。件の Masuccio の物語で、女主人公はこの名で呼ばれてはいない。本篇で他のすべての登場人物がそうであるように、ジェシカの名はシェイクスピアの創意工夫である。Sir Israel Gollancz, *Allegory and Mysticism in Shakespeare: A Medievalist on "The Merchant of Venice,"* Reports of Three Lectures by Sir Israel Gollancz (New York: Haskell House Publishers, 1973)によれば、"Jessica" は『創世記』に見える、「外を見る女」の意の "Iscah" に因んでいる（pp.62–63)。家から連れ出された日、窓から顔を出して、祭りの熱に浮かれた軽薄なキリスト教徒の顔を見ようとするような真似はせぬよう、シャイロックは事前にジェシカに警告していた。彼女はこのいいつけを破った。そして、飛び出して行った。その消息は名前に掬い取られていると覚しい。シェイクスピア劇における命名に特化された研究書 *What's in Shakespeare's Names* (London: George Allen and Unwin, 1978)で著者の Murray J. Levith は、鷹を結わえておく鷹匠の紐 "jess" から "Jessica" は来ていると説明している（p.82)。（Cf. *O. E. D.* [2nd ed.], "jess": "A short strap of leather, silk, or other material, fastened round each of the legs of a hawk used in falconry....") 作品中、「羽が生えたての若鳥」"fledge" と評されているジェシカは、紐を解き、その羽で「飛び立ち」"flight" を敢行したのだ（3.1.23–30；拙訳)。実際、父親の禁止は二重に蔑ろにされた。

34) グラシアーノの言う「ユダヤ人」は元来括弧付のものである。それは隠喩としてのユダヤ人に他ならない。このトポスは次稿で論及することになろう。

35) 駆け落ちに際してジェシカの姿勢は非常に積極的だった。Peter Holland, "*The Merchant of Venice* and the Value of Money," *Cahiers Elisabéthains*, 60 (2001), 13–30 の解釈は肯綮に当たる：「ジェシカは父親の代わりに夫、ロレンゾーの方を取る。一人の男の手からべつの男の手に渡されるよりは、婚約の流通を自分自身の意志で牛耳る道を選ぶ」(29)。彼女は、父親の意志に背反し、異邦人オセローと結ばれるヴェニス市民デズデモーナの姉であったと言えよう。しかし、二人とも選んだ相手が悪かった。Holland は、ジェシカがポーシャの比類なさを褒めそやすや、配偶者として彼女自身もそのような人物と結婚したのだと臆面もなく言ってのけているロレンゾーの態度（3.5.82–83）をとらえて、「ヴェニスの男の尊大さの奇妙に無粋な一例」(29）と酷評している。オセローについてはコメントを控えよう。

36) ロレンゾーはバッサーニオとは異なって、何ら労することなく小箱を手に入れた。彼は同じように、娘という財を勝ち得た。例えば、『創世記』の有名な逸話とは対照的だ。ヤコブは叔父ラバンの二人の娘レアとラケルを娶る。一人につき七年、計十四年、ラバンのため働くことと引き換えであった。この期間の労働と交換に彼はラバンの二人の娘をもらい受けた。(『創世記』、29章14–30節、『聖書』、[旧]、pp.47–48。)

37) シャイロックの反応、説明がつかなくもない。彼にとってジェシカはもはや死んだも同然なのだ。(Daniel Banes, *The Provocative Merchant of Venice*, p. 90.) 偏狭な思想に相違ないが、異教徒、殊にキリスト教徒のもとに走ったユダヤ人は少なくともユダヤ共同体にとっては、死んだものとみなされた。宗教的な理由が主であったはずだ。仮に何らかの形で、ジェシカのキリスト教への入信をシャイロックが既に知らされていたなら、彼のうちで、そうした想念は一層募ったであろう。同情すべきところはある。ただ通常、観客・読者は反感を覚えるであろう。ユダヤ人の精神分析学者 Theodor Reik, Chap. 3 "'Jessica, My Child!'" from the author's *The Secret Self: Psychoanalytic Experiences in Life and Literature* (New York: Farrar, Straus and Young, 1953), pp. 33–56（p.41）はところで、シャイロックの呪詛に面白い解説を施している。東洋系の民ユダヤ人は激情に駆られて暴言を吐くことがよくあるのだが、事情を斟酌してその罪を宗教的に免じてくれるよう神に願った。そのような祈りには特別の名称があった。Kol Nidre（コル　ニドライ）である。それは、ユダヤ人の主要な祝祭で唱えられもした。

38) ベルクソン、『笑い』[1900]、林達夫　訳 (1938／岩波文庫、1976 [改版])。引用部分、p.24。ベルクソンの学説を私は緩やかに適用している。

39) この場面についての Walter Kerr, *Thirty Plays Hath November: Pain and Pleasure in the Contemporary Theater* (New York: Simon and Schuster, 1963) の寸評は適切だ："Up, down, up, down, with the sentences growing tighter, the exhilaration and the agony coming closer together, Shylock is alternate-

ly sobbing and gleeful in ever-faster reversals until he is all but spun off the stage. The trick remains, of course, standard property among comedians today" (p. 179).

40) テューバルの報告のこの部分に対し、シャイロックは猛り立って「貴様、よくもこの胸を短剣でえぐったな」と応じている。人肉訴訟を起こし、シャイロックは同害復讐を求めた。人肉法廷の萌芽がここにあるようにも思われる。うがち過ぎであろうか。

41) 『創世記』、31章19-35節、『聖書』、(旧)、pp.52-53。

42) 亡き母親リア。Anita Gilman Sherman, "Disowning Knowledge of Jessica, or Shylock's Skepticism," *SEL*, 44 (2004), 277-95 は、リアは産褥で、あるいはジェシカを出産した直後に死んだのであろう、それで縁が薄いのであろうと察している (292, note 17)。

43) ポーシャの指輪が取り戻されたのとは、決定的に相違している：S. P. Cerasano (ed), *A Routledge Literary Sourcebook on William Shakespeare's "The Merchant of Venice"* (New York: Routledge, 2004), p. 20.

44) 『創世記』、29章17節、『聖書』、(旧)、p.47。なお、シェイクスピア時代利用可能であった英訳聖書、Geneva Version (1560), Authorized Version (1611)では二つながらレアの目は "tender" と訳されているが、以後の近代の異本では "weak" とされているケースが多い。後者ではイメージがかなり変わって来るが、大切なのはシェイクスピアにとってレアがどう映ったかであろう。Austin C. Dobbins と Roy W. Battenhouse は、版を明示していないが、"blear-eyed" (「かすみ目の」) と彼女を形容している (*op. cit*., 117)。Dobbins はいざ知らず、Battenhouse は神学に精通した研究者であるが、聖書の特定の表現につき訳語の選択の点で時代錯誤を犯しているのは、どうしてなのであろう。

45) 別稿で論じるが、バッサーニオやグラシアーノは妻からの指輪を手放した。対照的に、シャイロックはこれを大切にしていた：Anselm Schlösser, "Dialectic in *The Merchant of Venice*," *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik*, 23 (1975), 5-11, (7). リアの指輪への思い入れはシャイロックの人間性の証しである：Robert Alter, "Who Is Shylock?", *Commentary*, 96 (July, 1993), 29-34 (32).

因みに、本篇では指輪はいずれも女から男に贈与されているが、これは当時のイタリアの慣行に倣っているという：Cary F. Jacob, "Reality and *The Merchant of Venice*," *The Quarterly Journal of Speech*, 28 (1942), 307-15 (315).

46) どうしてそんなことが出来たのであろう。シャイロックが指から外していたのは間違いない。愛妻亡き後、想い出を敢えて絶とうとしたのだろうか。ジェシカはどのようにして、これを見つけたのだろうか。すぐ目のつくところに無造作に置かれていたのでは、よもやあるまい。家の中を散々物色して、ようやく探り当てた。ただ、出奔の際にではなく、前もって見つけ出していたのかも知れない。

47) John Lyon, *"The Merchant of Venice,"* Harvester New Critical Introductions to Shakespeare (New York: Harvester Wheatsheaf, 1988) の見解をわれわれは共有する："the point of the monkey may lie precisely in its arbitrariness and insignificance" (p. 70).

48) Maurice Charney, "Jessica's Turquoise Ring and Abigail's Poisoned Porridge: Shakespeare and Marlowe as Rivals and Imitators," *Renaissance Drama*, N. S., 10 (1979), 33-44 もこの表現をグロテスクと感じている (40)。

49) Suzanne Penuel, "Castrating the Creditor in *The Merchant of Venice*," *SEL*, 44 (Spring, 2004), 255-75 は、猿はジェシカとロレンゾーの間に生れて来る子供のパロディであると、大胆に想像している (268-69)。それが真実なら、彼らの行く末は暗澹たるものであろう。

50) Joan Ozark Holmer, *"The Merchant of Venice": Choice, Hazard and Consequence* (Houndmills: The Macmillan Pr., 1995) がジェシカの猿について述べている見解は適切だ："A monkey could be seen as the animal version of the human fool, whom noblemen also kept for their entertainment" (p. 126). 猿と人間の愚行、及び、虚栄のテーマについては、H. W. Janson, Chap. 7 "Apes, Folly, and *Vanitas*" from the author's *Apes and Ape Lore in the Middle Ages and the Renaissance* (London: The Warburg Institute, Univ. of London, 1952), pp. 199-237 が刺激的。

51) 関連の文献は余りに多い。ここでは、「ユダヤ人問題」の専門家 Charles Patterson が近著で記しているこうした観点からの「ユダヤ人誹謗」"Vilification of the Jews" に触れるにとどめる (*Eternal Treblinka: Our Treatment of Animals and the Holocaust* [New York: Lantern Books, 2002], pp. 44-48)。Patterson は

アラブ世界における現今の反ユダヤ主義に言及し、アラブ世界のさる有識者や宗教的権威の驚くべき発言を二例、引用している。彼らによれば、アラーは、猿や豚の末裔であるユダヤ人を殲滅すべしと言っているとの由である（p.48）。典拠は『コーラン』。真偽の程はどうなのであろうか。なお、Patterson の本書には邦訳がある：チャールズ・パターソン、『永遠の絶滅収容所：動物虐待とホロコースト』、戸田清　訳（緑風出版、2007）。

52）Jackson Campbell Boswell, “Shylock’s Turquoise Ring,” *Shakespeare Quarterly*, 14 (Autumn, 1963), 481–83 (483). ドイツでは二十世紀始めまでトルコ石の婚約指輪が愛好された（Boswell, *ibid*., 483）。シャイロック夫婦はドイツ的出自を持ち合わせているようである。連関は、興味深い。Daniel Banes, *The Provocative Merchant of Venice* はこの石に護符の如き効力を認め、これをなくしたことがシャイロックにとって不幸の始まりであった旨述べている（p.99）。トルコ石を始めとする宝石類のフォークロアについては、George Frederick Kunz, *The Curious Lore of Precious Stones* [1913] (New York: Dover Publications, 1971)が詳しい。トルコ石については “Turquoise”（pp.108–14）の記述を参照のこと。

53）指輪にわれわれは解釈上、過度の、場合によっては逸脱的なまでの投資をした。そのことは自覚している。とはいえ、リアの指輪の意味するものは非常に重い、というのは疑い得ない。

《SUMMARY》

The Merchant of Venice: The Topos of Gift-Giving

Yasuhiro OGAWA

It is not necessarily noticed that although Shylock is legally entitled to the return of the principal of 3,000 ducats, eventually he is deprived of its right by Portia in the pound-of-flesh court who insists that he refused to accept it, which careful perusal of the text does not validate. Antonio is thus exempted from the debt; this virtually means that Shylock's principal has been transferred to him.

Apparently, this proceeding ushers in the subsequent disposal of Shylock's property, one half of which is granted to Antonio with the other half being confiscated to the state of Venice. Curiously enough, Antonio instantly declares that he will give untouched the entire lot to Lorenzo, whom he expressly describes as having recently stolen Shylock's daughter, Jessica. He provides for the donation taking effect only when Shylock dies, which specific stipulation turns the gift-giving into something like bequeathal that Antonio performs vicariously.

On account of Antonio's mediation, the other portion of Shylock's wealth is reallocated to Shylock himself. However, Antonio deliberately makes him leave the said share as a fortune to Jessica and Lorenzo who eloped robbing him of ducats and jewels.

Taking these circumstances into consideration, it is no exaggeration to say that Shylock's enforced testation proves to be something like seizure of his property committed by the Venetian court.

The metaphorical spoliation is seemingly associated with the literal thievery by the couple. Incidentally, in both cases bounty drops down from above. Shylock's legacy is referred to by Lorenzo as Biblical manna. Jessica throws down a casket of treasure at him.

Among the stolen valuables was Shylock's ring, his deceased wife's cherished remembrance. Jessica goes so far as to exchange it for a monkey. In this degrading transaction something pricelessly or even transcendentally precious is made tantamount to something apparently nugatory. Her blatant misdemeanor may be said to be a symbolic one in that

the negotiation could possibly involve her desperate but doomed endeavor to free herself from the fate of her Jewishness that the ring emblematizes; indeed, it is rather unlikely that her newly acquired status as a Christian wife to a Christian Venetian husband will mitigate her alienation.